

CA1
EA947
B71
#27 Nov. 1979
DOCS

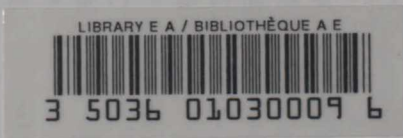


日加国交50周年記念
論文コンテスト入選作発表

1979年11月
No.27


カナダ

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
DEC 28 1979
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE



トピックス——2
 クラーク政権、初の施政方針演説——4
 カナダの通信技術——6
 ニューファンドランドあれこれ 平野敬一——8
 エドモントン便り 藤永 茂——9
 日加国交50周年記念論文コンテスト入選作
 私のカナダ像 内野栄子——10
 一教師のカナダ体験 権田梅芳——13
 十年目のカナダ生活 真壁知子——16
 カナダの思い出 西原容子——18
 新しい世界へ向けて 佐藤 修——20
 美し北の国カナダ 山田 徹——22
 今後の日加貿易関係 坂本信雄——25
 カナダ人の発明発見(III)——28
 編集後記——28

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

カナダが五百万ドル拠出 カンボジアの飢饉救済に

カナダ政府は、うち続く戦争によつて米作に大きな支障をきたし、深刻な飢饉に見舞われているカンボジアの人々を救済するため、赤十字国際委員会とユニセフ（国連児童基金）を通じて五百万ドルを贈ることになった。

マクドナルド外務大臣およびアセリン国際開発省（CIDA）担当大臣によると、カンボジアでは栄養失調のため、二百五十万人の生命が危ぶまれていることが、赤十字国際委員会とユニセフの現地調査団により報告されている。同国の人口は、飢饉、遺棄、戦死、脱出などにより、一九七五年の八百万強から約五百万に減少した。また赤十字国際委員会は、五才以下の幼児はほとんど生存せず、五才から十才までの子供たちも危機に瀕している。と報告している。

海底資源も州の管轄に 連邦政府が決定

カナダ連邦政府は、このほど、沿海海底の石油、天然ガス、その他の鉱物資源は、それぞれの該当する州に所属する、と発表した。カナダでは地下の天然資源は州に所属すると憲法で定められている。しかし、沿海大陸棚の海底資

源については憲法に明記されておらず、その管轄権は長い間論争の的になっていた。

今度の決定により、ブリテイッシュ・コロンビアやニューファンドランドなど、大陸棚に面している州は広大な海域にわたつて資源所有権を得たことになり、今後はその海底油田などの開発に大いに力を入れることが予想される。

クラーク首相は、この決定について、「海底資源を州所有にしたのは地下資源と同じようにするためだ。カナダがバランスのとれた形で発展するには、それぞれの地域にそれぞれの優先順位を定める能力がなければならぬ。そのためには何らかの財政基盤が必要」と述べている。

日本海外石油開発が取得 カナダ北海の石油鉱区権

コロンビア・ガス開発会社（アルバータ州カルガリー。米コロンビア・ガス・システムズ社の子会社）は、このほど、日本海外石油開発と、カナダ北部ボーフォート海における鉱区権を譲渡する契約を結んだ。

契約によると、海外石油開発はコロンビア社がドーム・ベトロリアム社（カルガリー）から買った同社の持ち分三・七五パーセント

のうち三・五パーセントを五千万ドルで取得した。ボーフォート海の鉱区権は、ドーム社が五〇パーセントを握っている。

ケベック州で大電源開発 十月末に送電開始

モントリオール市の北方およそ五千五百キロの荒蕪たる寒冷地で、現在、世界的規模の大発電開発計画が進行している。これは、ケベック電力公社（ハイドロ・ケベック）の補助機関であるジエームス湾工ネルギー公団（SEB）が一九七三年以来進めてきたプロジェクトで、十月末には第一期工事の最初の発電機が送電を開始した。

第一期工事は、ケベック州からジエームス湾へ注ぐ最大の水路であるグラント河（ラ・グラント・リビエール）に三つ（JUGUETS, LGY）の発電所を建設し、イーストマンおよびカニアビスカウ両川を方向転換しようというもの。これらの発電所が完成すると、総出力一萬二千六百九十九メガワット、年間電力生産量六百二十六億キロワット時の、一大発電施設となる。

ジエームス湾一帯では、発電開発のほか、鉱産物資源や森林の開発、観光資源の開発・整備も同時に進められている。

酸性雨汚染で被害 米加国境沿いの河川や作物

米加国境沿いの農作物、河川、森林は、予想より広い地域にわたつて汚染されていることが、この

ほど発表された米加合同調査報告書で明らかにされた。

報告によると、亜硫酸ガスと窒素酸化物が空中で混ざり合い、硝酸と硫酸の希薄溶液となつて雨と共に降ってくる、いわゆる酸性雨が原因。オンタリオ州では二ツケルの世界的産地であるサドベリー一帯を中心に、百四十か所の湖が魚によつては生存できないほど酸性化し、東部カナダにあるその他数千か所の湖もそういう徴候を示し始めているほか、次のような被害が起っているといる。

- ニューヨーク州北部のアディロンダック地域では、およそ百か所の湖で魚が住めなくなり、観光収入が百万ドル以上も減った。
- ノバ・スコシア州のいくつかの河川では過去二十五年間に酸性度が場合によつては十倍も増え、魚が住むにはほとんど限界に達している。鮭の産卵場になつている河川もあり、鮭の数にも影響がでるものと心配されている。

- カナダで最も生産性の高い森林の大部分は、酸性雨の汚染地域にある。もし汚染が続けば、林産業に大きな経済的影響を及ぼすことになる。

報告によると、カナダでは年間五百万トン、米国ではおよそ二千五百七十万トンの二酸化硫黄（亜硫酸ガス）が排出されている。そのうち、米国から約四百万トンが国境を越えてカナダに入り、五十万ないし七百万トンがカナダから米国に流れているという。

ケベック州、州民投票へ一歩 「主権・連合」白書を議会に上程

ケベック州のレベック首相は十一月一日、「ケベック・カナダ―新しい協約」と題する白書を州議会に提出した。これは、同首相が唱えてきた「主権・連合」という構想を州政府の公式見解として打出したもので、カナダとは同一の通貨を用い、通商上の関税障壁を設けないなど、「連合」の形をとりながら、政治的には主権を保持する独立国家を提唱している。

この白書に対し、クラーク首相は「連邦カナダの継続と相反するものであり、全く受け入れられない」と述べた。各州政府もきわめて批判的。

白書によると、主権国家としてのケベックは、すべての課税権、領土保全、市民権、裁判権を保持し、北大西洋条約機構や英連邦にとどまり、国連加盟をめざす。一方、ケベックとカナダは、連合体として、物品の流通、市民の通行を自由にし、通貨も共有することになる。

六六％はカナダ残留を希望 ケベック州民の世論調査

独立が現状維持か――州民投票が来春予定されているケベック州で、このほど州政府の依頼で世論調査が行われた。世論調査研究センターが実施したこの調査は、千人以上の住民に係員がそれぞれ自宅を訪問し、約一時間、百を

超す質問に答えてもらう形ではなされた。

調査によると、質問に応じた人々の六六パーセントがカナダの一部としてどまった方が得たと信じており、一七パーセントが損だと答えている。

しかし、ケベックの今後のあり方については、わずか一五パーセントが現状維持に賛成しただけで、三九パーセントは新しい連邦体制一九パーセントが主権・連合、一七パーセントが独立を支持した。七パーセントは「わからない」。

州民投票の質問が、単に「あなたは独立に賛成ですか」というのであれば、一九パーセントが「はい」、七二パーセントが「いいえ」と答えるという。また七三パーセントがケベックはカナダにとどまった方がいいと考えているのに対し、二二パーセントが「カナダとは異なつた国」になるべきだ、としている。

五四パーセントは、州民投票を通じてケベック州政府に主権・連合について交渉する権限を与えてもいいとしているが、五九パーセントはケベックがカナダにとどまるという条件つきでそれに賛成している。また、ケベックが別個の国になつてもカナダとは提携するという条件で主権・連合を支持したのは四一パーセント、これに反対したのも同じく四一パーセント、一八パーセントがわからない、と答えている。

日本から七五〇〇万ドル ケベック州が借入れ

ケベック州政府は、このほど富士銀行を先頭とする日本の五銀行の融資団から、七千五百万ドルを借入れた。金利は年九・八五パーセント、貸付け期間は十五年（平均十二・五年）。ジャック・バリゾー・ケベック州蔵相は、八月初旬東京で契約書に調印した後、ケベック州と日本の間の取引関係がひじょうに良好であることを力説した。日本の銀行は最近数年間にハイドロ・ケベックおよびケベック州政府にたいし四件の同種の貸付けを行っている。これらの資金は一般的な用途に使われる予定。

カナダ政府、八公社を「売り」に カナデア、デハビランドなど

シンクレア・ステイブンス蔵出大臣は、九月末、民間に買い手があれば八つの国営企業（資産総額八億四千三百万ドル、従業員総数一万二千五百人）を譲渡する、と発表された。民営移行については、委員の対象がカナダ人に限られること、移行後も政府はその機能を持する権限を留保すること、などの条件をつけている。

「売り」に出された公社（うち三つは子会社）は次の通り。
●カナデア社（モントリオール）。一九七六年に連邦政府が米資本のゼネラル・ダイナミックス社から四千六百万ドルで買った航空機会社。長距離ビジネス機「チャレン

ジャー」で知られる。資産およそ二億四千七百万ドル。

●デハビランド・エアクラフト・オブ・カナダ社（トロント）。一九七四年に英国のホーカー・シドリー・グループから買った航空機会社で、トウイン・オッターやダツシユ7などの短距離離着陸機を製作している。

●エルドラード・ニユクリア社。一九四二年にウラン生産のため買った、カナダ唯一のウラン精製会社。子会社のエルドロー・リソーシスおよびエルドラード航空を含め、資産総額は推定三億一千五百万ドル。

●ノーザン・トランスポート・システム社（エドモントン）。北方のマッケンジー川盆地および北極西部一帯で陸上・海上輸送システムを運行している。子会社のグリムシヨール運送会社とも、過去五年間利益を上げていない。

老人ホームにソーラー・ハウス

太陽熱だけで暖房した二階建ての老人ホームが、このほどオンタリオ州南部のエイルマー市に建設された。

二十九部屋からなるこのアパート式の建物の地下には、容量約四万リットルの断熱水タンクが設置されている。南側に面した屋根に取り付けた集熱板のパイプにこの水を通す。これを続けると、夏の終りまでにタンクの水はかなり熱くなる。それを冬の期間、暖房用に使うわけである。

太陽熱のみで暖房したアパートは、カナダではこれが初めて。

ケベック、言語条例を緩和

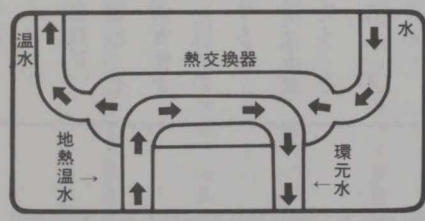
ケベック州フランス語局は、このほどレベック内閣の承認のもとにケベックにおける英語その他の少数派言語の使用を規制したこれまでの言語条例にたいする州民の批判に応じて、新しい仏語化条例を発表した。

修正された新条例の主な趣旨は、広告、店舗のカタログ、会社名などへの英語使用の規制をゆるめること。また新条例は、言語憲章がケベックで開催される会議や専門家の討論会には適用されないことも明文化している。

地熱温水を暖房に レジヤイナ大学で研究

サスカチュワン州のレジヤイナ大学では、地下およそ二千メートルにある深層温水をくみ上げて暖房に利用する地熱ヒーティング・システムを建設している。

同様のプロジェクトはフランスとソ連でも行われているが、北米ではこれが初めて。この



システムが成功すれば、レジヤイナ大学の暖房費は一日約八百ドル節約され、十年で元がとれるという。

同大学では、今年一月、およそ深さ二千二百メートルの井戸を掘った。来年は、そこから一口ほど離れたところに二番目の井戸を掘る。最初の井戸から、深層の地熱で温められた塩水（摂氏約五十七度）をポンプでくみ出して、熱交換器を通したあと、二番目の井戸で地下へ戻す。熱交換器に水を通して地下温水の熱を吸収させ、それを通常の温水暖房システムの中を循環させる——という仕組みである。

地熱温水を使って、電力を起すことも可能だという。

イ・ヘント

○九月 アルバート州対外貿易大臣が来日。エドモントンで北方圏環境会議。バンクーバーで日加紙バルブ会議。アルバータ州農務大臣が来日。フリティッシュ・コロンビア州からベネット首相一行が来日。マイム劇団シアター・ピヨンド・ワーズが各地で公演（十一月まで）。

○十月 東京で開催された国際北太平洋漁業委員会の年次会議にカナダから代表団。カナダ・トレッド・センターで電子機器展およびカーペット・床材展。
○十一月 東京モーター・シヨウ（東京晴海埠頭）にカナダも出品。カナダ・トレッド・センターで紙・バルブ工業機器展。

クラーク政権初の所信表明

経済問題を最重要視

対話と協力で対州関係に新時代を

五月に発足したクラーク政権は、十月九日に召集された下院で進歩保守党内閣の施政方針を発表した。エドワード・シュライヤー総督が朗読した施政方針演説(正式には「勅語」と呼ばれる)によると、新内閣は「話し合いと協力」を通じて連邦・州間の融和を図るほか、カナダ経済を強化し、また原子力、文化、外資、身障者対策などに関して再検討するという。演説のおよそ半分は経済政策に費やされた。要旨は次の通り。

基本方針

一、カナダ国民は政治に変革をもたらした。カナダ国民ひとりひとりの権利、自由そして機会を高め、カナダ連邦の根本である連邦と更新の精神を再確立することが、その変革の基本目的である。

一、新内閣は、また、カナダのもつ優れた点——一大市場と三つの大洋に面し、天然資源に恵まれ、多様な文化と地域性をもっていること——を活用する意向である。

連邦・州関係に新時代を

一、新内閣は、就任以来、連邦対州の関係を改善するよう、あらゆる努力を傾けてきた。その結果、目ざましい進展が見られた。宝くじに関して協定が締結され、沿岸の鉱物資源についても、いくつかの沿海州と基本的な合意に達した。連邦・州関係にこうした変革を実現する。ことは、現政府の理念の基本をなすものである。州との協力を通じて、具体的諸問題の現実的解決を求めている。政府は連邦・州関係に新時代をもたらすことを重要目標にしている。話し合いと協力が、この新時代の看板となろう。今や意見の相違を融和させ、力を合わせなければならぬ。

主な提案・検討事項

一、「情報の自由」法の制定。政府情報は国民が入手できるようにする。例外は限定し、かつ具体的に規定する。例外の適用に関する紛争は、政府とは独立した

機関によって解決されるようにする。

一、「インディアン法」の一部修正。現行法によると、インディアン以外の男性と結婚すると、インディアンとしての諸権利を失う。その部分を修正し、不公平を無くする。

一、配偶者手当を、現在同手当ての対象になっていない配偶者にも支給する。

一、在郷軍人に関する法律を一部修正する。

核エネルギー開発を検討

一、国民ひとりひとりのプライバシーをさらに尊重する。

一、議会の権限を拡大するための諸改革。委員会の権限と能力を強化し、議員の発議権を高め、議会に対する閣僚の責任を増大する。

一、身体障害者の特殊なニーズ、ボランティア活動の役割を強化する措置、外資審査庁の運営など外資に関する諸政策、

大規模公共事業におけるコスト超過を防止するための必要措置——を検討する四つの特別小委員会の即時設置。

一、カナダにおける将来の核エネルギー

カナダ議会の開院式

カナダ議会の開院式は、伝統ののっとなっておごそかに行なわれる。まず、女王陛下の名代である総督が、儀礼服を着用した騎馬警察隊の一行に守られて、4頭だての馬車でリドー・ホール(公邸)から議事堂へ向かう。総督は議事堂正面にある「平和の塔」(Peace Tower)の玄関で馬車から降り、儀仗兵を観閲したあと議事堂に入る。

一方、上院の宮内官(Gentleman Usher of the Black Rod)が下院へ赴き、282人の下院議員を総督が勅語を朗読する上院(議事堂の反対側——向かって右側にある)に案内する。下院議員は、首相と閣僚を先頭に、宮内官に従って下院から上院(議席数104)に入場し、そこで上院議員および最高裁判事とともに勅語を拝聴するわけである。勅語は、カナダの公用語である英仏両語で朗読される。もちろん、女王陛下が自らご出席して勅語を読まれることもある。

カナダ連邦議会の開院式における勅語朗読は昔、英国国王が近侍の武士(のちの世襲貴族)を相手に行なった訓話(そのはじまりだ)という。しかし現在のカナダでは、女王も総督も勅語の内容には関与しない。勅語の肝心な部分、すなわち施政方針や諸提案は、首相および閣僚の指示のもとに、上級閣僚が作製する。

開会2日目は首相が勅語にもられた主な提案について説明したあと、在野党首領(トルドー自由党党首)とその他の野党党首がそれぞれの主張を展開する。

これでいよいよ審議が開始するわけである。



職杖を肩に、下院議長、首相、下院議員を上院に案内する宮内官。

カナダの通信技術 各方面で成果

新しい情報システム テレホンを現場実験

カナダは、最近、世界でも最先端を行く通信技術を次々と開発している。前号で紹介した多目的のテレホン(双方向テレビ)に続いて、注目すべき最新技術を二、三取り上げてみよう。

連邦通信省とベル・カナダ社は、千ドルをかけて共同でビデオツクスの現場実験を行うことになった。これは、通信が開発した世界最高の双方向テレビ・システム「テレホン」(前号参照)を、約一千の住宅および事業所に設置し、カラー・テレビの画面に最高一万ペーじにのぼる情報を写し出せるようにする実験。データ・バンクに貯えられた情報は、電話で「呼び出す」こと

ができる。

テレホンは、このほど行なわれたカナダタイムス間の新聞伝送実験でも大きな成功を収めている。

便利な電子式電話 用途も多様

カナダは世界に先駆けて、電子式電話機(写真)の開発と実用化をはかってきた。電子式電話機の設計面はベル・ノーザン・リサーチ社が、製作面はノーザン・テレビコム社が担当し、ベル・カナダ社がそれを購入して、現在、電子式電話機パイロット計画をすすめている。おそらく今後数年以内に、現在の半電子式電話機に代わって、新しい電子式電話機が一般に使用され始めるだろう。そうなればまさにこれはカナダの研究のたまものである。

電子式電話機は、現在広く使われている標準型の電話機と、技術面でも実用面でも違っている。現在の電話機(米加両国生産されたのは、一九五一年のことであった。それ以後、一九六三年のブッシュホンを別とすれば、電話機の変化はほとんど見られず、登場時の機能と姿をほぼ現在まで受け継いできたといえる。構成からいえば、呼び出しベル、フックスノッチ、送話器と受話器、マイクロホン(炭素粒容器に張った振動板により音声を電流に変える)を基本とするタイプのものである。

それに対して、電子式電話機では聴く、

話す、番号を正確に伝える、ベルを鳴らすなどの諸機能が、それぞれ集積回路が作動するだけで行なわれるようになって

いる。したがって、使われる部品の数がずいぶん少なくなり、消費電力も小さく、修理費用も安く済む。また何よりも(最初の設備投資が一たん回収されれば)生産コストが安くなる。

電子式電話機の特徴をいくつかあげると、

まず音声がかちょうドハイプアイ(高音程度の)ラジオやテレビから聞こえてくると同じ音質になる。また、ベルの代わりに二種類の電子音が交互に鳴って呼び出しを知らせる。呼び出し音の音量や高低は、自分で調節することも可能。そのほかいろいろな標準機能があり、あるいはオプション機能も手頃な価格で利用できる。たとえば頻用番号や非常用番号などを記憶させたメモリー・バンクなど

のも一つである。

将来は、注文によるダイヤルアップ装置も出現するだろう。

これはちやうど電卓のような表示板で、

電話器にないで使用するものだ。事実、普通の計算機として使えるが、電話にも使え、と宇宙と直結する地上局の運用システムを行なうに至った。現在実施中の同プロジェクトは、少なくとも来年春季までは続けられる予定である。



装置に記憶されている番号を確かめたりすることができ

キーボードのボタンは、現在の十二個よりふえて十六個になっている。現在の

ブッシュホンでは数字以外のボタンは二個(*と#の記号)だが、電子式電話機では六個ついている。これらはすべていわば予備のボタン——現時点ではパイロット計画にさえ組まれていない速い未来の技術に備えて設計されたボタンである。

これらの予備のボタンが実用化されれば、外出先から自宅の電話番号を回して部屋の電灯を消したり、マイクロ波式オーブンのスイッチを入れたりすることも当り前のことになるだろう。

衛星から直接テレビ送信 家庭や有線テレビ局に

去る九月二十五日は、カナダのテレビ史上、記念すべき日となった。カナダの誇る国内用通信衛星ニクサBが、皿の形をした小形地上局(写真)を備え付けた地方の一般家庭、コミュニティ・センター、有線テレビ網に直接送信を開始したのである。

このプロジェクトはカナダ政府が放送業界や州政府と共同で推進したもので、その結果、カナダは世界でも初めて家庭と宇宙とを直結する地上局の運用システムを行なうに至った。現在実施中の同プロジェクトは、少なくとも来年春季までは続けられる予定である。

この計画が成功し、家庭直結の衛星



で低コストの地上局開発に努力してきている。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。

この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。

加・米が共同開発衛星利用の救難システム

この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。

汚染など、大規模な防衛を、石油、石炭、天然ガス、水、食料、医薬品、その他の物資の供給を確保する。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。この「地上局」は、従来の地上局よりも、小型で、低コストで、かつ、多機能で、かつ、柔軟で、かつ、拡張性がある。



ニューアンプランドは、はたしてカナタなのだろうか？ ひと夏、この島の首都セント・ジョーンズで暮らしながら、私は、しょっちゅうこの質問を自分に繰り返していただよう思う。ニューアンプランドは島だから(ただし行政的にはその他のカナタのことを本土「メインランド」と称することになるのだが、島の人たちの本土に対する気持は、かなり複雑に屈折しているように思われた。わが北海道と本州のような関係だろうと思っただら大間違い。歴史的にいつても、ニューアンプランドが正式にカナタ国の一州になったのは、戦後の一九四九年のことであり、それまでカナタに帰属していた歴史もなく、また特別の親愛感をもっていたわけでもなかった。三十年前まで、カナタは、ニューアンプランドにとつて純然たる外国だった。アメリカと同程度に外国だったのである。一九四九年の選挙でカナタに加盟し、その一州になることが決まったのだが、この決定は島民の圧倒的支持を受けていたわけではなかった。カナタ加盟は僅少の差で決まったのである。カナタ加盟論の他に、独立を主張するもの、アメリカへの加盟を唱えるものなど、実際に世論のいろいろに分かれていたのである。カナタへの加盟後、長くニューアンプランド州首相をとめることになったジョーセフ(愛称「ジョーイ」・スモールウッドの雄弁と政治力とがなかったら、一九四九年の島民の決定は別の形をと

ていたに違いない。もし、四九年にカナタ加盟派が敗れていたら、ニューアンプランドは、カナタの一州とならず、別の道を歩んでいたかもしれないのである。僅か数百セントの票の動き如何で、これは充分現実の事態となりうることだ。したがって、私たちがニューアンプランドのカナタ加盟の中に「本土復帰」的な民族の悲願や宿願を読みとったりしていただに違いない。また、四九年にカナタ加盟派が敗れていたら、ニューアンプランドは、カナタの一州とならず、別の道を歩んでいたかもしれないのである。僅か数百セントの票の動き如何で、これは充分現実の事態となりうることだ。したがって、私たちがニューアンプランドのカナタ加盟の中に「本土復帰」的な民族の悲願や宿願を読みとったりしていただに違いない。もし、四九年にカナタ加盟派が敗れていたら、ニューアンプランドは、カナタの一州とならず、別の道を歩んでいたかもしれないのである。僅か数百セントの票の動き如何で、これは充分現実の事態となりうることだ。したがって、私たちがニューアンプランドのカナタ加盟の中に「本土復帰」的な民族の悲願や宿願を読みとったりして

— 平野敬一 —

ニューアンプランド あれこれ

ナタからやってくる外人たち「Foreigners」が表現に出くわし「びくりしたことをおぼえている。年配者の投書らしかったが、カナタが外国であるという実感がまだ根深くこの島に残っていることを投書は示していた。カナタというしよになった歴史が浅いためまだ生じていない、ということになるら

また、地理的にいても、ニューアンプランドと本土との距離は、相当のものがある。地図をひらいたら、この島がカナタの東の外れに位置していることは、だれにでも分かるが、現地にしばらく住んでみて、私はこの島の本土からの距離感、そこから生じる孤絶感、といったものが、はじめて実感として身にしみて分かったような気がした。とにかく遠い。どこからも遠いのである。私はオタワからセント・ジョンズまで飛行機を利用したのだが、それでも正味七時間半の飛行時間だった。オタワから太平洋岸のバンクーバーまで五時間もあれば楽に飛べるのだから、これは随分遠いな、という実感だった。「地の果て」というと大げさだが、ニューアンプランド特有の荒涼とした地肌を空からはじめてながめるとき、そんな表現がうっすら浮かんでくるのだ。ここからは、最密りのノバ・スコシアすら、けっして近くはない。

私は、この距離感に恐れをなしたわけではない。

飛行機の便もなかった一時代前のこの島の孤絶感、おそらく想像を絶するものだったに違いない。

地理的孤立は、当然、島の人のモヒリナイ(可動性)にも影響する。統計によると、島の住民の九五パーセント以上が島生まれだという。よそからの移住者がそれほど少ないのである。こういう人口構成は、北米社会では他に例をみない。もちろんでイナス面もあるだろうが、この特性から、この島特有のメンタリティ、風俗、言語表現、文学などが生じることになるのである。島で使用する英語も本土の英語と同一でない。文学作品も独自の世界を打ち立てている。現在、地元の大学でニューアンプランド英語の辞書の編纂が進められているし、学生はニューアンプランド文学の講義を聴くことができるようになってる。久しく絶えたい無視と蔑視にもめげず、この島にいるように私には感じられた。

(東京大学教授)

秋の訪れをひそかに願う気持が、今年
は我々の心の中にあつたかもしれない。

それは、大きくふくらんだ、松茸狩りへの期待であつた。数年まえから、お隣りの
プリティッシュ・コロンビア州のあちこちで松茸がどっさり取れるという話は耳
にしてはいたが、実際に見事な松茸を人さ
まから戴いたのは一昨年のことだつた。

それが昨年には、アルバータ大学の若い
日本人の方々がカナディアン・ロッキーの
最高峰マウント・ロブソンの近くで、大
きな段ボール箱に幾箱もの松茸を収穫し
て意気揚々とエドモントンに帰り、私ど
もまで、たつぷりとおすそ分けにあずか
つたのだつた。

しかも、今年は、その同じ場所まで私
どもを案内して下さるとのこと、家内
も私も共に、風の音がたしかな秋の到
来を告げる日を、心待ちにしていたので
ある。

九月の中ばの週末、九名からなる松茸
狩りの一隊は、苦手の朝起きをもとも
せず、三台の車に分乗してエドモントン
を出発して西へ向つた。目的地はマウン
ト・ロブソンの西南にあるヴェイルマウ
ントという小さな町であつた。昨年の秋、
その町の北のはずれの砂地をおおう松林
の中で、見事な松茸を一人で十本、二十
本と見つけたというのである。

町のモテルに部屋をとると、早速その
松林に出かけることになった。近くの山
並みの中腹には、かなりの規模の山火事
の煙が見えられた。

はやる気持を押さえながら踏みこんで

行つた松林の立木の大部分は、ロッジ・

ポール・バインという松の木だつた。丈
高く、まっすぐに天に向つてのびる松の
木である。松茸が周りに生えるのは、そ
の松ではなく、やはり日本の赤松に似た
松の木だという話であつたが、新米の私
には、その辺の区別の見当もつきかねた。
しかし、経験者たちが、いちはやく感じ
取つた凶兆は、昨年にくらべて今年は地
面がいやに乾いてい
るとのことだつた。

どうやら、このあた
りの今年の夏の雨量
は僅かなものであつ
たらしい。三台の車
のトランクに、大き
な段ボール箱をいく
つも押し込んで乗り
入れたまではよかつ
たが、豊かな収穫の
夢は、みるみるしぼ
んでいった。やがて、
夕陽がロッジ・ポー
ル・バインの梢をも
れる頃になつても、
ただ一本の松茸も見つからない。野外で
の焼き松茸の饗宴用に酢醬油まで用意し
ての遠征（片道四百キロ！）であつたの
に……。

しかし、手ぶらのままで松林の中を右
往左往する人びとの表情もムードも、意
外とほがらかだつた。いや、十分に楽し
かつた。これで大きな松茸がとり放題に
でもなろうものなら、楽しすぎたかもし

エドモントン便り 松茸狩り

藤永 茂

れない。

結局の所、ただの一本もとれなかつた
が、それでも、台所つきのモテルの大き
な一室に九人みんな揃つての夕食は、限
りなく楽しかつた。ビール、ワイン、松
茸が入るはずだつた牛肉しゃぶしゃぶ、
松茸ぬきの松茸ごはん……。

真夜中近く、戸外のひんやりとした秋
の空気に身をさらしながら、自分たちの
部屋に戻る途中で望
み見た山並みには、
山火事の火は見えず、
ただその黒いシルエ
ットが夜空をくつき
りと切つていた。

カナダの夏は山火
事の季節でもある。
夏の間は毎年山火事
のことがニュースに
なる。カナダに来た
はじめの頃は、「現
在いくつの山火事が
out of control」と
いうニュースを聞い
て、これは大変、と

思ったものだつたが、要するに人間の手
が回りかねているという位の意味の場合
が多いとわかると、「なあんだ」という事
になつた。今年の夏は、件数約三五〇、
焼失面積約三二〇万エーカー。これは北
海道の面積の約六分の一である。カナダ
の山火事の大部分は落雷による自然発火
がその原因だそうだから、太古の昔から、
五、六年でわが北海道全体がまるまる焼

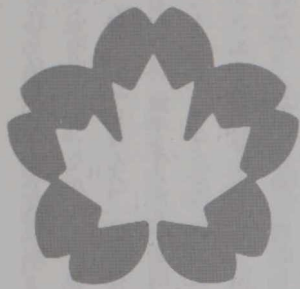
け跡になるような割合いで山火事があつ
たのだらう。

バンフ国立公園の西に連なるクート
ネー国立公園内で一九六八年に落雷によ
る山火事があり、六千エーカーの森林が
焼失した。その直後にたまたま現地を訪
れた私たち一家は、まだ煙にくすぶるハ
イウェイを西へ抜けたあたりで、やたら
に熊に出会つたものであつた。火事を逃
れて移動していたのであらう。

今年の夏、久しぶりにその山火事の時
所を訪れた。焼け跡を通るハイキング・
コースをたどつてみると、まだ沢山の焼
けた木がそのままになってはいたが、その
あたりに数知れぬロッジ・ポール・バイ
ンの若木が、すくすくと青い空に向けて
成長していた。もう我々の背丈よりはる
かに高くなつてはいる。その焼け跡の山の
斜面は、ファイヤ・ウィードと呼ばれる
草の紅紫色の花で美しく一面に埋められ
ていた。松林の中で、まぼろしの松茸
を求めてさまよいながら、私は、ふと、
まわりの木々たちに話しかけてみたいよ
うな気持になつた。大きな自然のふとこ
ろの中にいだかれてはいるという快い安ら
ぎが、私の胸にあつた。

松茸こそ見つからなかつたが、私たち
は松の林の中で、もっと貴重なものを見
たのではなかつたか。だからこそ、松茸
ぬきのささやかな夕食のひとときが、我
々すべてを心あたたかき善人たちがかり
に変えてしまつたのであつたらう。

（エドモントン大学教授）



日加50周年記念論文コンテスト

内野さん、権田さんが入賞

日加協会が主催した日加国交五〇周年記念論文コンテストの入賞者は、東京都目黒区の内野栄子さん（聖心女子学院高等科三年）と愛知県岡崎市の権田梅芳さん（連尺小学校校長）の二人に決まった。応募作品は、八百二点。そのうち「私とカナダ」が六百二十七点、「これからの日加関係」が百七十五点だった。応募者は六才の子供から八十八才の老人まで、また地域的には日本全国はもちろん、バンクーバー、エドモントン、モントリオールまで、広範囲に及び、関心の深さを示した。カナダ観光、「赤毛のアン」、大阪万博や沖縄海洋博の見学、あるいは日系カナダ人との交流、カナダ在住などを通じて得た感想をまとめたのが多かった。「これからの日加関係」を扱った作品の大部分は、勉強のあとが見られたものの、資料不足のせいか具体的な提言が少なく、内容的には今ひとつ物足りない、というのが大方の選者の評であった。ただ、いずれの作品にもカナダに対する熱意がうかがわれて、関係者は入選作を決めるのに苦労したという。入選者は下記のとおり。（敬称略）

●入賞（賞金 二十万円、副賞 東京—モントリオール間往復航空券）
内野栄子（東京都目黒区）
権田梅芳（愛知県岡崎市）

「一教師のカナダ体験—小学生の相互訪問を通して」

●佳作（賞金 五万円、副賞 カメラ一台）
真壁知子（オンタリオ州トロント）
西原容子（大阪府吹田市）

佐藤 修（千葉県我孫子市）
山田 徹（ケベック州モントリオール）
坂本信雄（千葉県松戸市）

●選外佳作（ラジオカセット一台）
多田正俊（大阪府堺市）

片岡法子（栃木県宇都宮市）
橘 明美（埼玉県草加市）
塩入 隆（長野県長野市）
新保 満（オンタリオ州ウォーターロー）

〈入賞〉

私のカナダ像

うちの
内野 栄子

生まれてこの方、私は日本から足を踏み出したことがない。だから十七才の私は、まだ見ぬ外国に、あれこれ思いを巡らすのが大好きである。中でも、美しい森と湖の国カナダへは、かなり強い憧れを抱いてきた。子供の頃に目を輝かせて聞いた、動物と仲の良いインディアンの少年「ロッキーちゃん」が住んでいたロッキー山脈、赤毛のアンの故郷——これで充分であった。今、私は、カナディア

ン・ロッキーの山と樹と千変万化の湖の織りなす数々の風景のポスターの前に立

ち、ため息をつきながら、日本の二十七倍の広さを感じている。

妖精がくれた贈り物の国カナダ。つい最近まで、それは単なる憧れ以上の何物でもなかった。美しく広大な自然が、カナダの二要素であるにせよ、そこに住む人々、文化、それをまとめるカナダという国そのものに対して、ほとんど興味を持っていなかった。

そんな私にとって、カナダが急に身近な国として感じられたのは、兄の留学という契機を通じてである。兄がど

う経過でカナダを選んだのか、よく知らないが、ともかく今年の春旅立って行った。そして折にふれて兄が寄こす手紙から、カナダの人々の生活、考え方といったものを感じ取れるという、幸運な機会に恵まれた。さらに私は、この夏休み

に三週間ほど、ある英語会話の合宿に参加し、そこで数名のカナダ人と知り合い、カナダ人の生活様式と共に国民性にふれることができたこともあって、私のカナダ観は急速に育ってきたのである。

よく「日本人が外国を知っているのに比べ、外国人は日本のことをほとんど知らない」という話を耳にする。しかしそれにもまして、我々が知っていると思っ

イメージは、他のどの国に対するよりも、まさにこの後者にあてはまるのではないだろうか。カエデの国旗(「楓」より「カエデ」と書く方がびっぴりくると思うのは、私だけだろうか)、カナディアン・ロッキ―、赤い制服の騎馬警官、アイス・ホッケー……このような断片的なイメージ以外に、カナダを語れる人は、少なくとも私の周りにはほとんどいなかった。そして、彼らをアメリカ人と同一視していたことは否めない。事実、私の接した範囲内では、言葉をはじめ、カナダ人とアメリカ人の間にこれといった違いを見い出せなかったのだから……。

では、カナダ人とはどのような人々なのだろうか。それを考えることなしにカナダという国を理解するのは、不可能だろう。またそれを考えることは、とりもなおさず、一人の外国人としての私が、全く異なった背景を持つ文化を理解することにつながるだろう。

言い古されたことかも知れないが、日本は単一民族国家である。同じ日本語を話し、よく言われるほど同じ物の考え方をすると私には思えないにせよ、文化の基盤や、発想の原点はほとんど同じだろう。そして私たちは、日本人であるという強い意識がある。ところが、カナダにおいては、これが少し異なってくるようだ。人口比は大ざっぱに言って四割が英国系、三割強がフランス系、残りの三割が他のヨーロッパ諸国とアジア系と言われ、いわゆる多民族国家を形成してい

る。それは別に驚くべきことではない。南隣のアメリカもそうだ。しかし、アメリカには、「アメリカ的」と称される考え方や文化が歴然として存在する。例えば、北部、南部といった地域性はあるにせよ、アメリカ人という統一した意識が基盤になっていっていると言っただろう。

しかしカナダの場合、確たるイメージが存在しない。というより、未だ出来上がっていないのではないかと、私には思えるのだ。人口比が前述の通りといっても、実際にはカナダの、というよりカナダの内包する文化は、英国系、フランス系の二つに大別されるだろう。面積を考えると(カナダの主要部たるオンタリオ、ケベックの両州を合わせれば、日本の七倍余りの広さがあるというのだから)、別に驚くにあたらないのかも知れないが、やはり、一つの国の中に全く違う文化と言葉が共存しているというのは、信じ難い。

この両者は、例えお互いに、モントリオールとトロントといった大都市の住人で、生活様式が大変似ていても、物の考え方の基盤などに差異があるらしい。兄によると、モントリオールのフランス系の人々と話していると、多分に日本人と話しをしているような感じがするが、トロントの英国系の人々と話をしていると、日本の感覚では、どうしてもズレが出てくる、という。彼は、この夏休み、ロンドン(カナダの)のある英語学校へ通い、そこで沢山のフランス系のカナダ人と知りあったのだそうだが、彼等は、自分たちのことを、誇りをこめて「ケベクォワ」、

つまりケベック人と呼ぶのだそう。そして少なくともそこに集まった彼らのうち、七割が、「カナディアン」、つまりカナダ人であるより、「ケベクォワ」であることの方が大切、と答えたのだという。少なくとも現代の日本で、日本人であることより、〇〇県人であることの方が大切、と答える人が何割いるだろうか。

これと対比させて面白いのが、英国系カナダ人の意識といえる。兄が今いる地域は、川ひとつ隔ててアメリカというカナダ最南部の町アムハーストバーグ。言ってみれば、言葉も慣習も、生活全ての面にわたり、アメリカと何ら変わらない文化圏なのだが、そこに住む人々の強烈な「カナダ人」としての自覚を、折に触れ感じるといふ。何かアメリカ人と異なった存在でありたいという意識が、脈々と流れているのを感じるそうだ。例えば、同じ連邦制の政治体制でも、カナダは立憲君主制、アメリカは共和制だが、この相違を自慢げに話す人がいるという。「我々の女王が……」という言葉はよく聞かれるそうだ。また英国へ旅行する英国系カナダ人の多くは、服装のどこかに、カ

エデのバッジなどをつけるという。純カナダ産の商品には、必ずカエデのマーク入りのカードがつけてある——というように、アメリカの人間や経済と混同されるのをさけたがるようだ。

反面、ケベックの人々は、カエデの代わりに百合の紋章(ケベックの象徴)をつけ、ケベック随一の大都会モントリオールでは、店員が「Que desirez-vous?」ではなく「May I help you?」(どちらも「いらっしやいませ」の意)と話しかけると、少なからず、不快を感じるらしい。この英系、仏系のカナダ人の関係、米国とカナダの関係は、日本人の兄にはとてもわかるべくもないという。このような状況を内包した国が、一つの国家として機能していることに、私も軽い驚きを禁じえない。ましてカナダでは、各州がそれこそひとつの小国家にも相当する強い自治権を持ち、公用語の異なる州まであるというから大変だ。兄が春から籍をおいた高校(兄は、慶応大学の四年休学なのに、日本人の一人もいない町、しかも、なぜだか高校を希望して行った)では、朝礼の時間に有線放送で必ず国歌



内野さんは、現在、聖心女子学院高等課の三年生。エッセイ・コンテストの一等入賞が決まり、しかも憧れのカナダへ行けるとあって、「信じられません。本当に夢みたいですよ」と感激していた。聖心女子学院へ進学して英文学を専攻し、卒業後はその専攻をいかした仕事をしたいという彼女だが、今のところは、カナダへ行って「観光だけでなく、博物館を見学したり、いろいろな人と話ができるように、早く英会話ができるようにしたい」というのが夢だ。家族は、本人のほか祖母、母、兄の四人。

11月14日、カナダ大使公邸で論文コンテストの入選者表彰式が行われた。左から、高島外務次官、権田さん、ランキン大使、内野さん、近藤日加協会会長。



を流すという。これは、他の学校についても同様らしい。また、政府の刊行物や施設などには、カエデのマークと、英仏両語の表示が並記されているようだ。日本人は、団結を日本人であることの中に求めているようなところがあると思うのだが、多民族国家のカナダ人は、団結をカナダの象徴であるカエデの国旗に求めているのだろうか。

日本の二十七倍もの広さ、東西の幅が

北海道から九州までの三倍余という途方もない距離、同じ国の中で、七つの時間帯——と並べてみたところで、まだ見ぬ私には、いくらガイドブック、写真集をひっくり返してみても、カナダの自然がいかに雄大なかは本当には理解しえない。ただ、その自然の壮大さを知ることなしには、カナダという国を、カナダ人を知ることはできない。北海道の景色をすべて十倍の広さにおきかえて……と言われても分らない。とうとう兄は「太平洋側の砂浜に立って、見える海全体を淡水の湖と思い、次に小麦畑と思い、また草原と考えてみる。そんな広がりがあるのがカナダなのだ。わかったか!」と書いてきた。こんな雄大な反面、都会でも少し大通りを外れ、公園の小径を歩けば、鳥の声がし、リスが足元を横切り、少し郊外へ出ればうさぎや、時には鹿の影すら見えるという。いわば自然の中に、人間が文明を築くに充分なだけの広さがある国、人類が未だ足を踏み入れたことのない地域が残っている国、それがカナダであろう。馬鹿馬鹿しいとは思いますが、太平洋に向かって立った私は、その広がりを実感に近いものとして迫って、その途方もない大きさに驚いたものである。

普通、日本と西洋の自然に対する関わり方を評して、「日本人にとっては自然は共存すべきものとしてあり、西洋人にとっては征服すべきものとしてある」と言われる。しかし、前述のような、自然の中に人間が文明を共存させているようなイメージ、そして厳しい自然保護の姿勢が

らすると、少なくともカナダ人にとって、自然は欠くべからざるパートナーとして存在するのではないかと。『西洋人にとっては……』という言葉は、カナダ人には当てはまらないのではないかと思える。もちろん、「共存」の内容は日本のものとは異なるにしてもである。いやむしろ、よほど「自然との共存」を重視し、実践しているのではないだろうか。

近代国家としてのカナダの重要な骨格をなすものが、この雄大な自然に支えられた豊かな資源であることは疑いない。カナダは、日本にとって石炭、小麦、木材、鉄鉱石、食肉、製紙用パルプなどの重要な供給源である。逆に日本からは自動車、電子製品、鉄鋼などの工業製品の輸出が多く、両国は補完関係をなしている。カナダは、その豊富な資源を背景に、経済の中に貿易が占める割合が高いのだが、そのうち七割は対米貿易、そして国内の主要産業のうち七割が外資系（多くは米国系）に支配されている。話が横道にそれてしまったが、カナダが資源の国であるということ、そして産業が米国の強い影響下にあるということも、私なりにカナダを知るのに必要なことがらだと思ふ。特に後者は、前に述べたアメリカ人への対抗意識に随分関係があると思われる。

正直言って、知れば知るほど、考えれば考えるほど、私のカナダ全体へのイメージは漠としてしまいうような気がする。全体を捉えようとする、個々(例えば複

そのものではないか、と私は思う。

そして何にもまして、いま私が感じているのは、外国人である私たちにとって、こうした動きは非常に分りにくい、ということだ。今までせっかくカナダ人と接する機会があっても、ほとんどアメリカ人と同一視していた姿勢、単に表面的な大自然への憧れだけといった態度、こういったものを取り除かなくては、カナダはその本来の姿を私たちに見せてはくれない。

日本人として、カナダのみならず、外国を捉えようとすることは、その国の人間、大自然、文化を含めて知ろうとし、自分と、自分を育んでくれた国とを比較して、そこに何か新しいものを見つけ出すことだと思う。口で言うほど、それがやさしくないのは、よく分っているつもりだ。知識の乏しさ(例えば今年が日加修交五十周年ということさえ、今回はじめて知ったほど)や、限られた体験、そして何より私の理解不足が大きな妨げになる。同時に、感性とも関わってくると思う。私は、多分間接的な形ながら、カナダに対してその「何か」を見出そうとし、それが新しい国を造って行こうとする脈々とした流れだと感じ取った積りである。日本から見れば、羨ましい点も多いが、カナダ人から羨ましがられることも多いだろう。例えば、殊に歴史の点などそうであろう。

自らの持てるものを大切にし、矛盾なき一つの方向へ向けて歩んでいる国、そしてその国を動かし、何より大切な「自

然」という財産を忘れない人々——そういうカナダが、私の憧れの国であることには、変わりがない。

私はまだ見たことのないカナダを、一生懸命知ろうとしている。もし間違っていることがあったら、教えていただきたい。

私はこの七月、外務省見学に、高校生として参加し、園田外務大臣や、志賀外務次官とお話する機会があった。そして国交が、一国を左右するどんなに大切な問題であるかを、改めて認識した。

〈入賞〉

一教師のカナダ体験

小学生の相互訪問を通して

権田梅芳 ごんどうめよし

「校長先生、私は今、涙の海に泳いでるの」——といって、大柄なベツツイが私にとりすがり、涙にまみれた頬をよせる。ドナやシェリーたちも、次々にさがる。デビットやケンたちは、歯をくいしばって、私の手を強く握る。

ゲートの手前にも、母親にかき抱かれ、声を上げて泣いて別れを惜しむ子がいる。昭和四十九年十月三十日夜の羽田空港のロビー、二週間を日本の家庭で過ごしたカナダの小学生たちが、今、立ち去ろうとしている。

翌五十年六月十一日朝のウイニペッグ国際空港でも、全く同じ光景が展開されていた。アン校長と私は、肩を抱き合い、

将来、兄や私がつくるであろうカナダの沢山の友だちと、心からのおつきあいをしたい。今度は絶対にアメリカ人と混同するような失礼なことはいけません。

私はこの夏、カナダに行きたかった。だが、単なる見物だけに終わらせたくなかった。思いとどまった。一人でも多くのカナダの人たちと友だちになるためには、まず話すことが大切だと思った私は、懸命に英会話を学んだ。来春、大学進学が決まったら、厳しい冬のカナダを訪ねようと計画をたてている。

残る手を強く握り合った。お互い責任者として事を成し終えた感慨が胸に迫り、二人とも、感謝をこめた「ありがとう」の外、言葉は出なかった。

子どもたちもまた、サヨナラ集会の日記に、「このままここに残りたい。リナータもジョンもデビットも、みんな泣いていた。私たちは、日本に帰る気がなくなってしまった」と書いている。

アン校長の手紙に、「全員安着のお電話で、ほんとにホッとしました」とある。前年秋に同じ思いを味わった私には、痛いほどよく判る。彼女はまた、海を越えてお互いの手をさしのべ、友情の誓いを

結び得たことを喜び、「愛する子どもたちにしてやれたことは、二人が地上を去った後まで消え去ることはないでしょう」と言ってきた。

私は一介の小学教師に過ぎない。しかしこの四十年間、子どもたちにしてやることは何でもしてやろう、と考え、実践してきた。子どもたちの海外交流も、愛し子らと祖国の輝く将来をこいねがって企てた試みの一つである。

戦時中、私は教壇から応召し、四年間大陸・南方に転戦した。一時フィリピンで学校に関係してラテン系の校長さん一家と親交し、また蘇州では中国人に知己を得た。酷寒の北満から熱帯の島々まで多種多様な土地柄があり、そのどこにも人が住みついて営々と働く姿は、壮烈とさえ感じた。彼らの人生観・世界観には私の理解に苦しむ面もあり、またその人生哲学は風土・歴史等と深く関わっていた。さらに、私たちはいつの日か、彼らと世界という土俵で角力をとらねばならず、もつと外国と外国人を知らねばならぬ、と思った。

四十六年秋、幸運にも文部省から欧米視察に派遣された際、私は、ただ教育事情だけでなく、政治や経済、文化と人間を知らうと精力的に努めた。在留邦人や日系人には、外から見る日本、外人の日本人観等について率直な意見を求め、見学・懇談会・ホームステイなどでは、つとめて多くの人たちと話し合った。特に、教え子の在外第一線商社マンや公務

員とパリ及びニューヨークで会い、「このままいけば、日本は再び世界の孤児になりかねない」というのを聞いて、愕然とした。

その後の私は、活力に富み、頭脳の柔らかな子どものうちから、広い視野、多角的創造的な考え方や国際理解の芽を育てなければならぬと考え、まず、児童の海外文通・作品交換による交流を推進したのである。

海外を垣間見た私が、最も深い感銘を受けたのはカナダであった。一口に言えば、カナダの自然と人間に魅せられたのである。

欧米歴訪の際、私は90×180センチ大の児童版画三点を携え、加米英三か国で教育関係者に贈って、作品交換の希望も表明してきた。翌年秋、ウイニペック市教育局から作品が届いた。米英両国からは、音沙汰はない。帰国直後から、各地に出来た知人に手紙も書いたが、返事はカナダの友からだけであった。

やがてその一人、同市キング小学校のサミュエル校長が来日し、四十八年春、その一行を岡崎に迎えた。両校の児童たちは、すでに文通を始めていた。この日、岡崎公園の桜花爛漫たる茶席で、美合小学校の内田PTA会長が、カナダ児童の招待を申し入れ、これが日加小学生親善相互訪問のきっかけになったのである。

カナダの人たちは、誠実であった。万事ゆったりして物の方、考え方、心づもりがあり、率直な反面、思いやりが

深い。ユーモアに富み信義に厚い。

質実重厚、生活のテンポはのろいが、私たちには良い反面教師で、つき合えば心も和む。

子どもたちには、スケールの大きなカナダの自然に触れさせ、自然と人間の関わりを学ばせたい。特に広大な平原と農業形態、無限の森林と林産業、そして自然を愛し自然を生かす人々の生きざまを理解させ、環境や風土が人をつくっていることを感得させたい。

明朗でおおらか、物事にあくせくしない気質や、家族の団らんや知己隣人との心温まる交際ぶりを、肌で知らせたいとも考えた。

遠く海を隔てるとはいえ、カナダは隣国である。私はウイニペックで接した日系人、カナダ人の双方から、戦中戦後三十年にわたり中部カナダ開発に尽くした日系人の並々ならぬ努力とその功績について聞いた。カナダは建国して日も浅く、多民族混合の連邦で、開放的でもあり、そして日系人の社会的地位の向上は、今や著しいものと見た。

また、米国の経済的桎梏に苦しむカナダの人々は、戦後奇跡的な復興を遂げ、経済的に対米独立の道をひた走る日本人の勤勉と努力に対し、ひそかに敬愛の念を抱いていた。そして、日本人の知識と科学技術に期待していた。

カナダは広大な土地と無尽蔵の資源を持つ。将来両国が相互に補完して繁栄し、相携えて世界平和に貢献するならば、寄与するところ極めて大なるものがあろう。

新しいことに苦勞はつきもの。相互訪問の実現までには紆余曲折が続き、双方ともに悪戦苦闘を重ねた。サミュエル、アン両校長の粘り強さには舌をまいた。ペン・パルたちの友情の灯も大人たちに反映して計画の挫折を防いだ。

前回の視察で州教育次官、市教育長、日本総領事等、有力な人たちと知り得たこと、その方々がなお在職中であり、親身になって支援していただけたことは、全く幸運であった。

とりわけ、見知らぬ異境の地、異邦人のもとへ、いたいけな我が子を送るカナダの親たちの逞しき、愛し子への信頼と期待の大きさには目を見張り、アン校長の私たちに寄せる信頼の重さに、強烈な感動を覚えた。

四十九年十月、アン校長のグロブナー小学校から、六年生男子四名、女子八名の親善使節が来校し、美合小の児童の家庭に分宿して通学した。

彼らは言語、風習、生活様式、教育事情等の高い壁を乗り越えて、学校、家庭、町内などすべての場で、おおらかで人間的、主体性に富み、かつ協調性豊かな民

族性を遺憾なく發揮して、町の人々を驚かせた。

歓迎集会で早速市長の胸に自分のバッジをつけて贈る、物おじしなない態度、Tシャツ一枚で登校する寒さに強い体質、注意をすなおに守る素直さ、納得できるまで質問する反面、相手の立場を思いやる心くばりなどが、随所に見られた。寿司を好む子と絶対食べぬ子、スポーツ気遣いと大嫌いな子など、個性は丸出し。走れば遅く、動作は緩慢であわてず騒がず、これまた町民と美合の子を驚かせた。

トヨタ自工の生産工程を見学して仰天し、千二百年の風雪に耐えた雨ざらしの三月堂に感銘し、鹿とたわむれながら「日本人は、世界一動物を愛する人たちだ」とも言った。彼らは彼らなりの印象記を残した。適度の外交辞令も加えられていて、楽しい内容である。

ウイニペックを訪れた美合の子どもたちも、いろいろな壁を平気で乗り越え、短い睡眠時間に耐え、ハード・スケジュールを見事にこなし、行く先々で人気者になつて、私ども大人を驚かせた。四日目には



「自信はなかった。ただ私どもがやってきた試みが何らかの形で紹介されれば、多くの学校でも、われわれもやってみようか」という気になるのではないか。そうならば、子供たちのためにもいいことだという気持ちで書いただけ」というのが、権田さんがコンテストに応募した理由だ。作品は、権田さんが愛知県岡崎市の美合小学校で校長をしていたときのカナダとの児童交流について書いたものである。岡崎市では、現在数多くの小中学校で外国の学校との交流が盛んだ。市や一般市民の協力および理解もあって、権田先生の努力は実を結びつつある。

ウィニペッグを訪れた美合小の子供たちは、グローブナー小学校の子供たちと友情を深めていった。



取組み合いのけんかをした男子、六日目には恋(?)のさや当てをする女子も現われる始末であった。おっとりとした機敏、身体で感情を表わすのと静かさとの違いのままに、両者は友情を深めていった。

カナダの子らは、来日前、「便所」「痛い」など十余りの単語を学んできたが、日本語になじみず、通訳の配置で苦勞した。日本の子は、三か月の日常会話特訓で五十程度の基本型をものにし、簡単な辞典を使う練習をしたおかげで、どうやら意思が通じた。

あるパーティーで、子どもたちが「くじら」論議をしていた。日本側は、おぼつかない英語に手真似をまぜながら、先日見学した家畜市場をとり上げ、「君た

ちはあの可愛い目をした子牛まで食べる。日本の国は狭くて牛を飼う土地が少ないのに、人口は多い。だから海のものを食べなければならぬ」と力説、カナダ側も「うなずいて日加捕鯨会議は円満に妥結した。うちの子もなかなかやるな、と思う一幕であった。

何でも知りたがる求知心、さりげない慎しみ深さ、活発な行動力などが奇妙に調和して、「愛くるしくてバイタリテイに満ち、礼儀正しい小さな大使たち」と、帰国後も評判だったという。アン校長は、「私どもはみんな、彼らをもっと長く手許におきたかったと思っています。あなたは、あのような立派な子どもたちを持つて、あのような誇るべきでしょう」と書いてよこした。

私たちが未知へ挑戦し、ささやかな成功を収め得たのは、全く「人の和」のおかげである。

受入れ、訪問を通して、学区はいち早くその計画を全幅的に支持してくれた。私は世田谷区役所(ウィニペッグ市と姉妹都市で、中学生相互訪問を実施中)、カナダ大使館、外務省の指導を受けつつ、カナダ側と緊密な連絡をとりながら万全の計画を練り、市・県当局に承認を懇請した。やがて文部省は来訪児童の日本学校安全会への一時加入を認め、夏休み以外の海外学習を正規の授業と認めてくれた。日本交通公社、日航、CP(カナダ太平洋航空)も、特別の便宜を図ってくれた。

ある町内では、カナダ児童のため秋祭りの期日を変更し、他の町内では町民運動会を催し、ある家庭では身内の結婚式に振り袖を着せて参列させた。カナダからくる子供たちのためにトイレを改造した家も多い。

全父兄は廃品回収を重ね、不用品寄贈即売会を開いて資金をつくってくれ、市長はじめ市当局、市内五十四の国公立小中学校、ロータリーやライオンズの各クラブも、学区外の多くの市民も、支援協力を惜しまなかった。

カナダ側も全く同じで、アン校長の熱意に応え、PTAは全力投球を続け、市・州当局、日系人、教会等、市をあげて支援したという。父兄はバザーを開き、クッキーを作って売り、市教育局は助成金を支出した。受入れ家庭の母親たちは、米飯と味噌汁の講習会を開き、テキストを日本から取りよせて会話を学んだ。

日本の子どもたちに、より見聞を広め、より多くの人々と接触させ、より豊かな体験をさせようと研究を重ねて計画を練り、訪問・見学や集会・パーティーに連れて廻った。

「百聞は一見にしかず」とか「可愛い子には旅をさせよ」は英語にもあるように、万国共通の箴言であり、子どもを愛するのにもまた共通である。双方が払った大きな努力と自己犠牲は、すべて、豊かな未来を築き、次代を担う若者に対する深い愛情と大きな期待、さらには、日加両国の友好親善を一層深めようとする願いからに外ならない。

カナダ人と日本人は、全然異なる面を持つと同時に、全く同じ面を持つ。お寺で日系市民の奥さん方が昼食会を催してくれた日、子どもたちがお札に「ふるさと」「かあさん」「ホトンボ」などを歌った。はるばる海を越えて訪れた、まだ見ぬ父祖の国の健な気な子どもたちの歌声に、大人たちは抱き合って泣きぐずれ、私どももみんな涙にかきくれた。列席していたほかのカナダ人も、全員もらい泣きをしてしまった。終りに挨拶に立ったアン校長も、一言も言葉が出ず、テーブルにつく伏してしまった。

二週間学校生活を共にしたカナダのある子は、「彼らと私たちとは、話し方も行動のし方もまるで違っている。しかし彼らと私たちとは全く同じだ」と言い、ある母親もまた同じことを述べていた。

グローブナーの子供たちを迎えた当時の美合の子供たちは、現在中学や高校に進んでいる。カナダを訪れた十八人は、今春、全員が高校に進んだ。交際はいよいよ深まり、みんな再会を期している。来夏家族揃ってカナダ行きを予定している子がいるし、先方にも、アルバイトで稼いで、訪日を準備している子がいると聞く。

私は現在の連尺小学校に転動して二年半。ウィニペッグの知己たちと音信をかわしながら、新たにB・C州のパニヤ小学校長と相知り、児童の文通と作品交換を続けている。二年足らずのうちに、百名をこす子がベン・フレンドをつくった。

連尺の子供たちは、バニヤ小学校で催された本校の児童作品展の写真を見て、歓声をあげた。十一月には本校でもバニヤの作品展を開き、会期中にPTAは講演会も催す。児童の交換訪問の実現を望む親もある。

英語を習う子もふえている。今春来校したエドモントン・ロータリー・クラブ六名の方の歓迎集会で、児童会は日英どちらのことであいさつしようかと聞き、私たちがびっくりした。その日いっしょに植えて下さった国際児童年記念のライラックは、今すくすくと伸びている。

〈佳作〉

十年目のカナダ生活

まかべとも
真壁知子

(在オンタリオ州トロント)

私とカナダとの関わりは、今からちょうど十年前の一九六九年十月十日にはじまった。この一年は十周年目にあたるわけ、私は私なりにささやかな祝いなどせねばと思っていたのである。日加両国も正式に外交関係を樹立して五十年とか

そうすると、その五分の一にもあたる間を、日本人である私がカナダの社会で生きてきたということは、十分意味のあることのように思えてくる。

ちょうど十年前、私は東部にある大学で勉学をつづけるために、留学生として、単身はじめてカナダの土を踏んだ。飛行場におり立ったとき、夏の終りの、澄ん

教科書で学ぶ外国は、概論的・部分的で、なまの生活について知ることは困難である。文通で知る家庭や学校の生活ぶり、行事、習俗などから、子どもたちはいきいきと外国を感じとる。同時に、ほのかな友情を芽生えさせ、育てていく。心と心の結び合いほど人間の世界で大切なものはない。子どもたちの相互理解が徐々に深まり、お互いの見方や考え方が判り合えるようになり、ひるがえっては祖国を見直すようになってくれることを願っている。

だ冷たい風が、私を震え上らせたのを今でも憶えている。

私が入学を許された大学では、今から思えばささやかな額ではあったが、外国人か否かにかかわらず大学院の学生ほとんど全員にアシスタントシップを出していたから、それを唯一の学費と頼んで、私は貧しい学生生活をはじめたのであった。入学後間もなく、大学の事務部からアシスタントとして仕事をし、所得をうるためには、「移民」の滞在資格を得ねばならぬという知らせがあつて、あたふたとわずか三か月後に、私はその資格を取らされる羽目になった。多くの先輩日

系人一世が、出稼ぎとして太平洋を渡ってきたように、私は「出稼ぎ」を「留学」におき代えただけで日本を出てきたのであつた。出来るだけ早く目的を果たして帰国すること以外に、私の考えることはなかった。外国で移民になることは、永住か半永住を意味する。私には、物質的にも精神的にもその準備が全くなかったから、その資格を受けるのを躊躇したのであつた。

かくて、全く主体性もなしに「移民」の滞在資格を得たのであるが、今から思えば、それはその後私がカナダで生きていく上に大変な便宜をもたらした。私がずつと後に、新しい一員としてこの社会で生きていくという決心をする上にも、大きなきっかけになった。移民としての地位を得たことによつて、アルバイトをして生活費を稼ぐことも出来るようになったし、二年目からは州政府の出す奨学金に応募する資格を得て、幸運にもその後三年間は奨学金を与えられた。それによつて、働きながら学業を続けていく私の生活の基礎が整つたのであつた。当時のカナダの社会には、まだ戦後の移民ブームの名残りがあつて、右も左もわか

らぬ新来者をもそのまま受け入れて吸収してしまふ大らかさがあつた。この十年間、移民に対する世論も経済情勢も大きく変わったけれど、カナダが世界でも数少ない移民の国であることから、私は思いがけずその恩恵にあずかったのであつた。今なお世界のあらゆる人間に公平に門戸を開いて移住者を受け入れている国（カ

ナダだけではないが）があるということ、賞讃に値する。難民を二、三人入国させるかどうかと大ききわぎをしている日本と比べて考えてみると、まだ世界のどこかに数少ない入国の門戸が開かれていることの意義は大きい。私のように全く偶然に受け入れられた者のためばかりでなく、真にカナダを必要とする人、本当にカナダで生活したい人のために、入国の門は将来もずっと閉ざされずにおいて欲しい、閉ざしてはいけないと、今私は一市民として念じている。

私のカナダでの最初の休日は、感謝祭の週末であつた。「カナダの休日」をしようという友人と一緒に、ナイアガラまで一泊旅行をした。ものすごい水しぶきを上げて流れ落ちる滝と、道々遠々と続く紅葉の見事さが印象的であつた。雄大なカナダの自然は、社会の大らかさの象徴であるとも言えよう。

私がカナダに来た翌年に日本で万国博があつて、日本を訪ねたカナダ人も少なくなかつた。まだカナダドルも値打ちのあつた頃で、東洋の神秘の国もようやく一般のカナダ人（と言っても中流以上の人であるが）に「行ってみたい」という気を起こさせるほどになっていた。新聞やテレビが特集を組んで、盛んに日本紹介をやつていった。私は後の参考にとと思つてよく見るようにし、記事など集めておいたりした。日本製の小型車がカナダの冬にも十分耐えられることを証明し、街中で目立つようになってきた。地方の小さな町の中学校や高校の地理の時間など

で、日本の話をするようにという依頼が二、三あって、私は当惑しながらも私なりの日本紹介につとめたりした。一九七〇年から七一年の頃である。

カナダ生活も二年を経過した頃から、やっと落ち着いて周囲の様子がわかるようになってきた。私の普段の生活範囲は大学の構内に限られていたから、私の知る「世間」は狭いものだった。私は自分が常に「日本人」なのだという自覚、私という人間はカナダ人にとつてはいつも「日本人」なのだという思いにとらわれるようになった。将来、英語がこちら生れの人並みに流暢になり、つき合う人間はカナダ人だけ——というようなきがくるとしても、彼らの目には私は依然として日本人なのだということが、身にしみてわかるようになってきた。新移民として社会のメンバーになったとはいえ、顔色の違った異人種であること、日本人であることが、実際どのようにマイナスになるのだろうか。かつて日系人は西海岸では徹底的に嫌われ、排斥され、ついには住んでいるところから追われるような目に会っているけれど、「戦後派」の私は、将来どんな事態にでもくわすのだろうか。そんなことを考えてみるようになっていた。

自分が日本人であるという自覚は、日本人以外の他人がそう見ることから生まれるようなものである。他人は無意識にはあるが、常にお前は日本人なのだという態度で接してくるから、こちらこそその期待に応じて反応し、行動するように

なる。カナダ人の中には「日本人とは、日本とは」云々という一種の定義があつて、私たちはそれから自由になることは出来ない。「日本という国はアジアの一国であるが、高度に工業化した、高い生活水準を維持している国である。古い特異な文化があり、近代的な科学も発達している。それらを勤勉に働く一億余の人間がささえている」というのが定義の内容のようだ。これは十年あまり変わることもなく、どちらかといえば好ましい方だと言えよう。中国やインドから来た友人が、冗談に、カナダでは日本人であることの方が(中国人やインド人であるより)よつほど肩身の広いことなのだとおぼえていた。私という人間の、この社会における位置づけが、大いに日本という国から来た人間であることによつていことを思えば、その定義を背後に他人に接しられ、自らも他人に接することが出来たことは、プラスにこそなれ、マイナスにはなっていないのではないだろうか。もし私がカンボジアとかラオスとかネパールとかそんな未知の、発達のおくれた国から来た人間であつたら、カナダ人は私にどんな態度で接してきたであろうか。

私個人の学生生活は、一日中図書館でばかり過ごすようなものであつたが、ますます平穩無事であつた。そんな学生生活が都合七年間も続いたから、私の移民としての「社会の荒波」との対決はすつとおくれたが、カナダ社会への理解は深まつた。日本とはあまりに異質な社会であ

ることに間違いないのであるが、単に二つの社会を比べてみるだけでなく、相違の原因を知ることが課題になってきた。

カナダ大陸を西から東まで踏破し、一応国土のもつ距離感を体得したところで、この国はただ大きいだけでなく、とてつもなく多様で複雑な国であること、それは同時に大変理解しにくい国でもあるということがわかってきた。時がたつにつれて、私にはそれが何か重荷のように感じられるようになった。

一九七〇年前後には、ケベック州の独立分離運動が盛んであつた。大学で出会うケベック人は、そろつて分離主義者で



表彰式に出席した入選者の方々。左から橋さん、塩入さん、多田さん、西原さん、ランキン大使、近隣日加協会会長、坂本さん、佐藤さん、橋田さん、内野さん。

あつた。彼らは仏語系がいわゆる一流国民としての地位に甘んじている年月があまりにも水すぎた。それはどんな人間の精神衛生にもよくないことだ。分離の時は近づいた——とインテリらしい意見を私に聞かせるのであつた。

多様性文化主義、二か国語主義などが、国の政策となって啓蒙されるようになってきた。カナダは人種的、文化的にそれぞれ異なつた人間から出来上つている。お互いの相違を認め合うことから理解がはじまる、違つていること自体が素晴らしいことなのだというのは、イデオロギとして結構なことのように聞こえるけれど、日本のような「超統一」国家から出てきた人間にとつて、時には国の統一が危うくなりうるということ、少なくともそういう認識を持つ必要があるということは、考えてみれば深刻である。

連邦政府と各州の首長が年に何回か会つて討論をし、お互いの間の関係を確かめ合う。主題はいつもつまるどころ、どうしたら一緒になつていられるかということであり、ちよつと夫婦関係のように、別れられそうで別れられないのが、カナダの統一国家としての姿なのではないだろうか。首長の会合は一種の儀式のようになって、恒例行事としてくり返すことにだけ意義があるようである。私には彼らがたとえ何十回会合をくり返しても、お互いの相違と利害を乗り越えて一つのまとまりを作り上げるのは、至難の業のようにおもえる。少なくとも近い将来にはあり得ないことだと私は思っている。

たかだか人口十万余のプリンス・エドワード島州と、国の三分の一の人口が集めるオンタリオ州と、どうして同じレベルで考えることが出来るのだろうか。持てる州と持たざる州と、仏語系と英語系と、州の間には数えれば切りがない程の断続と格差があつて、私は気が遠くなつてしまふ。

最近の総選挙の結果は、地方分断の姿を最もすっきりと浮きぼりにした。ケベック州からは、現政権を担当する保守党の代表が一人も選ばれなかつたということ、自由党もまた西部を代表する人を全く擁していないということは異常である。真にナショナルな政党すらカナダには存在しないのである。各州が一緒にいることが、実にしんどいわけである。考えていると、厳しい現実ばかりが目について仕方がないのは、悲観的な私の性格のせいであらうか。

私のもう一つのカナダ理解は、先住の日系人とのつき合ひを通して深められたと思う。私の住んでいた都市には、カナダで最大の日系人口(二万人余)が集まり、社会をつくつている。中国人やイタリヤ人の街のように目にみえる共同体があるわけではないから、その社会を知りたいと思つたら自分からさがして近づいて行かなければならない。戦時中の強制立退きで西海岸を追われた日系人は、戦後、各地で散らばつて住むようになった。排斥をさげ、同化するために「散らばる」ことはむしろ意図的に行われたのであつて、日系人は目立つことを極力避けてき

たのであつた。私にも少しづつ知り合う人が増え、親しくつき合つてくれる人も出てきて、彼らのたどつた道を聞いたり、自分で調べたりするうちに、私の頭の中で二つの考察が行われるようになった。

その一つは、日系人が懸命な闘いのあとでカナダ社会に築き上げた、「模範的少数民族」としての地位の確固たる重みである。私は日系人のことを悪く言う人にはまだ出会つたことがない。日系人の社会的評価は、貧しい移民として社会のどん底で働いて、沢山の子供を立派に育てて、いま年老いていく一世たちの堅気さと清潔さがぎすぎたものであり、二世の親譲りのまじめさと勤勉がささえてきたものである。私は人間的にも、彼らの時代遅れで、律気で素朴な人柄が本当に好きになつてしまつた。戦後再定住して三十年余、日系人は東部という新しい土地でも、完全に信頼できる人間として評価されている。そのことからくる恩恵を、私たちに続いたものは、有形無形に受けているのである。私たち「戦後派」が新しい土地で歳月も浅く、少数民族ながらどうやらやつていけるのも、先人の日系人に負うところ少なくない。

二番目の考察は、日系史に何を学ぶかということである。今ある状態は、日本人がこの社会で生きてきた百年の時の流れの中で解釈してこそ、はじめて意味がある。まず私たちは先人のたどつた道を客観的に正しく理解せねばならないと思ふ。日本人がどんなにひどい迫害を受けたか、私たちの先人はカナダ社会からほ

とんど放逐されたという歴史的事実が、三十年前に起こつたのである。私はまたいつか、自分たちに、あるいは他の少数民族に、同じことがふりかかってくることもあり得ると思う。少なくともそういう現実認識を持つことが、大切なのだと思ふ。そうすれば、現実にそういう事態に直面したときに、おどおどしたり、同じような痛い目に合わずにすむのではないかと

〈佳作〉

カナダの思い出

にしはらようこ
西原容子

(吹田市立山田第三小学校六年)

私は、三才から五才までの間、おとうさんの仕事のつごうでカナダへ行きました。おとうさんとおかあさんと一つ年下の妹、映子と。だから英語はペラペラだつたのです。今では、もうまるつきりダメですが。

カナダの人は、日本人とちがつて外人が歩いていても平気です。そんなところはとつてもいいと思います。それにカナダは、とても美しい国なのです。

私たちの住んでいたところは、オタワのアパートです。十一階だての五階に住んでいました。とってもきれいなアパートで、日本でいえば、高級ホテルつてところですよ。でも、家の中でも、くつの上ま上がったり自転車を入れたりするので、洗たく機は家の中に置かないで、地下室にみんな置きます。洗たくするとき

思ふからである。あらゆる事態に終始一貫、現実的に対処すべきだ——これが私が日系史から学んだ教訓である。

長い間の学業を終えて、三年前に私は実社会へ出た。大学という温室から、実社会という戦場に移つて、今、私はどこかのコミュニケーションで自分のルートをつくるべく努力している。自分の間は、あたふたとした生活が続くことは確実である。

は、地下室へ行くのです。おかあさんと地下室へ行つて、洗たく機の上ですわつたのをよくおぼえています。それから、アパートの人のためのプールがあつて、私たちもよくそこへ行きました。

私がカナダへ行つてはじめてできた友だち、それは、アンドリア・ミラーという女の子で、私たちが、そのアパートへ引っこしてきたと同じ時期に、ミラー家も引っこしてきたのです。同じ年だし気が合つたのか、それからはなんでもいっしょですよ。おじさんもおばさんも、弟のブライアンも、みんなやさしい人で、家族どうしも仲よくなりました。あるとき、私たちとミラー家とで、チューリップのきれいな所へビクニックに行きました。ところが、子供四人がまい子になつたそうです。そして、おとうさんたちがみつ

すべりました。また、おとうさんと私と映子ちゃんて雪をほって、ほら穴を作りました。でも、こんなことは、どこでもできます。そこらじゅうが銀世界なのです。カナダで一番美しいのは冬だと思えます。

雪もつけて、家族でサーカスを見に行きました。とってもおもしろくて、動物がたくさん出てきたのをよくおぼえています。二回ぐらい見ました。日本とちがってサーカスは、よくあるのです。

私たちは夏にカナダにきました。あれから、秋が過ぎ、冬が過ぎ、春が過ぎ、また夏がめぐって秋が過ぎ、冬が過ぎ、春が過ぎました。ちょうど二年たちました。私たちが日本へ帰る日が来たのです。

その日、朝早くから飛行場へ行きました。ミラー家のおくりに来てくれるはずだったので、私たちは待っていました。なかなか来なくて、もう行かなくてはならなくなりました。その時、やっとミラー家がかけてきました。ぎりぎりだったので、あまり話はず、あいさつをかわして手をふるだけです。とてもとても、つらかったです。本当に本当につらかったです。

今、私は十二才。あれから七年ほどたったのです。そして、また妹の「清子」が生まれました。今、三才の子です。そんなとき、東京にミラー家が来ることになりました。そして、東京へ行く前に日本のことを少しでも知るために、大阪の私たちの家へ一週間泊まることになったのです。七月二十九日から八月四日まで、夏休みの間です。私はもう、わくわくするばかりです。そして、最初に会っ

たときはびっくりしました。同じ年のはずのアンドリアが、大人に見えたからです。でも、一週間のうちに、すぐなれて仲良くなりました。外人も日本人もひとつもちがいません。じょうだんを言うところや、ふざけたりするところなんて、日本人以上です。一週間に、アンドリアがトランプの遊びや他のゲームを教えてくださいました。私たちもトランプ、オセロゲーム、将棋を教えてあげました。とても、なつかしい気がしてなりません。

た。とうとうミラー家は東京へ行くことになりました。アンドリアは、おわかれの言葉をノートに書いてくれといいました。私は、てれてしまつてうまくかけませんでした。そして、その後、私も同じことをたのんで書いてもらいました。いろいろな言葉もよかったです。最後の「うこへ」という詩はとても心に残りました。

広い広い海があり
その海の深い深いところに
ひとつの岩がありました。

岩には三つの言葉がぎざまれています。
私を 決して 忘れないで

円の線をたどっていつてもきりがありません。
私たちの仲もこの円のように
かぎりのないものであるように。

この詩はいつも私の心の宝ものです。私は、アンドリアを飛行場まで送りに行きませんでした。カリーおばさんとアンドリアが、泣いていたそうです。私たち姉妹も泣きました。また、会えることがわかっていても泣きました。でも、十月

にまた来るそうです。そして私たちがいつかは東京へ行きます。本当に、私はしあわせです。小さい時のカナダの友と再会できるなんて。

おあさんが言っていました。外国というところ、どこか未知の、自分とは関係のない国のように思うけど、そこに一人の友ができれば、その国はもう親せきの国

新しい世界へ向けて

佐藤修

(千葉県我孫子市 会社員)

はじめに

カナダは、ほとんどの日本人にとって、ロマンや夢を思わせるもの、決して身近かな国ではない。むしろ、日本とは異なる国としてイメージされているように思われる。

カナダと聞いて、まず頭に浮かぶのは、美しいカナディアン・ロッキーであり、広大なプレーン地帯の小麦畑であり、無数の湖沼と河川であろう。しかも、それらはすべて、日本とは規模の全く異なる大きさをもっている。

単に広いだけではない。日本との違いをさらに大きなものとしているのは、その広さに対する人口の少なさであろう。カナダの国土面積は、日本の二十七倍、それに対し、人口は東京の二倍にしかす

になる。ミラー家がおじさんの休みの年を日本で送ることに決めたのも、私たちのいる親せきの国、という気がしたからだそうです。私にとってカナダは、ジョンおじさん、カリーおばさん、アンドリア、ブライアン、その他いっぱいすばらしい友だちのいる親せきの国なのです。

ぎなのである。狭い国土に、多数の人々が生活している日本にとっては、望み得ない夢が、そこにはある。

カナダは、また、移民の国といわれる。少数のインディアンやエスキモーを除く人口のほとんどが、最近、この広大なカナダにやってきた人々である。その中には、約四万人の日系カナダ人も含まれる。様々な民族が、それぞれの歴史を背負ったまま集まっている。統合された国家としては、非常に若い国であるといつてもいい。この点も、日本とは大きく異なる点であろう。

石油、鉄鉱石、ニッケル、ウランなど、鉱物資源やエネルギーの豊かなこともまた、日本と異なる点である。カナダは、資源においても豊かな国である。

日本とカナダの共通点

以上のように、日本とカナダの違いは非常に大きいように思われる。しかし、共通点もまた多いのである。重要なことは、違ふところと共通しているところをはつきりと認識した上で、相互に補充しあい、協力していくことであろう。

共通点の第一は、美しい自然である。今や日本の自然は、山紫水明とはいえないかもしれない。しかし、それでもなお日本の自然は美しいし、豊かでさえあるといつてよいのではなからうか。日本の国土の七〇パーセントは森林である。美しい湖沼も河川も少なくない。規模の点で、カナダとは比べられないとしても、質の点では比肩しうる美しさを持っているのである。残念なことは、この美しい自然が、工業化や都市化によって、損なわれつつあるということである。日本においても、カナダにおいてもである。

社会の多様性ということ、共通点の第二としてあげることができよう。カナダは、いうまでもなく多様な社会である。八十を超える民族、七十もある言語、まさにカナダは「モザイク社会」である。しかも、そうした多様な存在、多様な文化の共存を積極的に認めていこうというのが、カナダの姿勢のようである。

それに対し、日本はむしろ、均質な社会といわれている。確かに、日本は長い歴史をもち、人種的にも限定されている。言語もひとつといつてよい。均質と考えられないわけではない。だが、そうしたことの背景にある質的な多様性を見失な

つてはならない。日本は世界の文化のたまり場とさえいわれるように、そこには多様な文化が内包されているのである。宗教ひとつとっても、仏教とキリスト教が（しかも、それぞれ別の宗派が）平和に共存しているのである。日本の社会もまた、このように多様な存在を許容する社会であるといつてよいであろう。こうした多様性の底にある寛容性こそは、これからの世界にあつて、最も重要なことではないかと思われる。

第三の共通点は、中堅国家であるということである。カナダも日本も、決して大国ではない。日本は、経済大国といわれることもある。確かにGNPで見ると大國を思わせる。しかし、そのGNPを支える工業資源は、ほとんど輸入に依存しているのである。つまり、自分だけでは、GNPの半分も生み出せないのである。さらに、経済を支える政治の面では決して大国とはいえない。真の意味で、国際政治上、どのくらいのリリーダシツプがとれるかは、非常に疑問である。このように考えると、日本は中堅国家と自己規定するのが適切であると思われる。

日本もカナダも、工業先進国サミットのメンバーである。しかし、先進国意識よりもむしろ中堅国家意識をもって、サミットにも参加するべきであろう。大國の論理に対し、もうひとつの世界（中堅国家や開発途上国）を背景に、カウンタパワーとなることによって、世界の役割ではなからうか。

また、両国とも、平和を指向することと共通している。いや、この点は、共通という以上の深い係わりをもっていることを、とくに日本は認識しておくことが必要であろう。

日本は、憲法で、戦争放棄と平和主義を打ち出したが、その憲法の確立に当たったカナダ政府の果たした役割は、非常に大きなものであつた。さらに、講和により、日本が国際社会に復帰した後も、カナダ政府は日本の平和外交を積極的に支援してくれたといわれている。カナダ政府のためにも、我々は、平和憲法を十分かみしめていかねばならない。

第四の共通点として、両国とも独立戦争を経験していないことをあげておきたい。とくに、カナダにおいては、近代ナショナリズムの起点ともいふべき、市民革命も独立戦争もなく、上からの（つまり英国による）先取りのな指導により、創造された国家といつてもよいであろう。一方、日本もまた、明治維新という運動があつたくらいである。明治維新も、見方によつては、上からの指導による国家づくりといつてよい。

独立戦争の不在は、ナショナル・アイデンティティの希薄さにつながるという見方があるが、確かに、日本もカナダも、たとえば、ヨーロッパ諸国にみるような、強固な、自覚的アイデンティティに乏しいようである。

しかし、同時に、このことは、先に述べた寛容性と深く係わっている。ナシヨ

ナルな意識をこえた、コスモポリタンへの道が、そこには開けているといつてよい。

経済の貿易依存度が高いということも、両国の共通点である。もつとも、日本は、原材料輸入・完成品輸出型であるのに対し、カナダは、原材料輸出・完成品輸入型であるという風に、その構造は正反対である。しかし、貿易依存度が高いということは、経済が、ひいては国家そのものが、広く世界に向けて開いていなければならないということである。

以上、いくつかの共通点を述べてきたが、これらはすべて深く関係しあつていふことを強調しておきたい。中堅国家、平和、寛容さ、開かれた経済、希薄なナショナリズムは、いわばワンセットのものであり、さらに豊かで、美しい自然と深く関わっていることを理解しておく必要がある。

日本とカナダの、このような共通点と相違点に立脚して、はじめて、意味のある日本とカナダの関係が創造されるといつてよい。その意味で、もつともつと両国は相互に理解を深めていくことが必要である。

真の相互理解へ

昨年、約十三万人の日本人がカナダを訪れたという。そのほとんどは観光であろう。カナダも、積極的に日本からの観光客誘致に努めているようである。今年にはさらに、多くの日本人がカナダを訪問するであろう。確かにそれは、日本人のカナダ理解を深めることに若干の貢献は

しよう。しかし、留意せねばならないこ

とは、カナディアン・ロッキーマンをもつて、カナダのすべてを判断したりすることに

もなりかねないということである。事実、日本人は、カナダを「logs & rocks」の国とし

しか見ていないという、カナダ側の批判さえある。また、日本の観光客をもつて、カナダ人が日本を誤まつて推し量ること

もないとはいえない。さらに、観光客による交流のひき起す不幸なケース（たとえば、極東やパリで問題を起したような

ケース）も発生しないとはいえない切れない。日本とカナダとが相互理解を深めるた

めに、もっと適切なシステムが是非とも検討されるべきであろう。たとえば、市民

ベースの交流を支援するような政府間制度が、もっと充実されるべきである。

また、カナダ各地に生活している約四万人の日系カナダ人の協力をもつと得るべき

であろう。日本国内にいる彼らの血縁者も含めるならば、それは、日本とカナダ

を結ぶ大きなパイプとなるはずである。また、産業界も、単なる資源手当や貿易

取引といった見地からではなく、もっと長期的な視点からの交流や両国の相互理解のために尽力するべきであろう。

ているように思われる。

日本からの最初のカナダ移民、永野万蔵がビクトリア港に上陸したのが、一八七七年であった。ブラジル移民が始まる

三十年前である。ここにも、日加関係の深さがある。一九二九年、日加双方に公

使館を開設し、国交を開始する前に、すでに日加関係は始まっていたのである。

最近、日加関係はますます充実したものに

なりつつあるように思われる。しかし、日加関係は、単に日本やカナダの国

益だけの視点から考えてはならないことはいうまでもない。とくに、平和を指向

する中堅国家である両国にとって、その積極的協力関係の強化は、世界的な視

野から考える必要がある。そして、それがまた、開かれた経済構造をもつ両国に

とつても、必要なことなのである。近代西欧が指導してきた、現在の工業

文明は、今、大きな壁にぶつかっている。工業化を支えてきた安価な資源は少なく

なり、一方、環境面からの制約も強まっている。さらに、南北問題にみるように、世界の経済構造は不安定化しつつある。これまでの経済社会パラダイムを超えた、新しいレジーム、新しい文明の創造が必要になってきているのである。

然と機械文明との積極的調和への模索で

ある。アメリカ文明と自己を画するとい

う意味もあって、自然保護に対する関心は極めて高いようである。第二は、多様

な文化の共存と統合を目指す新しい文化への模索である。

これらの点で、若者の果たしている役割は極めて大きい。首相の年令が四十才

まさにカナダは若い国であるといえよう。カナダこそ若者の新しい巨大なコミュニ

ンの成立しえる平和と愛とやさしさにみちた国という見方もある。多様な価値観

が共存し、それぞれが自己を主張しはじめた現在の世界において、カナダの試み

は評価されるべきである。日本もまた、先に述べたように、寛容な社会である。

平和と愛とやさしさも、日本にとっては重要な社会価値となっている。日本の英

知とカナダの勇気が結びつくことによつて、新しい文明への道が開かれることは、決して不可能ではあるまい。

自然との調和に関していえば、これも日本が追い求めてきた価値観である。近代工業化の過程で、やや道はずしたと

これは内部化されているといつてよい。カナダの豊かな自然を、世界のためにうまく

活かしていくことは、日加関係の協力の大きな目標となるべきであろう。日本

のもつ工業技術や自然力の有効活用技術が、積極的に活かされるべきである。たと

えば、最近、注目されているソフト・エネルギー・パスのような行き方は、日

加の協力によって、つまり、カナダの資源と日本の知恵によって大きく前進する

のではないかと思われる。以上のような認識のもとに、日本、カナダ両国は、個人レベル、産業レベル、

さらに国家レベルで、積極的な協働関係を強化していくことが望ましい。さらに、

そうした日加関係が核となつて、協力の輪が広がっていくならば、日本とカナダ

両国にとつては大きな喜びといふべきであろう。世界の歴史は、大きく回りつつある。

そして、その中で日本とカナダの役割は、極めて大きいことを、我々は銘記すべきである。

〈佳作〉 うま 美し北の国カナダ

やまだ とおる
山田 徹

(在モントルオール)

いかなる不思議な宿命か、古稀の年になつて、昨秋私は遙々カナダに居を移し

た。夢想さえしなかつたことである。しかし七十年の生涯をいま振り返つて

みると、私にとってカナダはなかなか因縁深い国ではあった。

さ細な事ではあったが、少年の頃最初に出会った外人教師は、カナダ人でトロント大学を出た人だった。真好きで、いつもパイプをくわえ、唇の片隅にひきつれのできた人だった。トロントの名もその時初めて知った。

しかしなんといっても私の生涯の中で大きな衝撃を与えた事件がカナダで起きた。それは父の死であった。

一九二五年、突然私は父客死の報に接した。当時父は大阪汽船の最大級の商船の機関長をしていたが、二月某日脳溢血で急逝した。バンクーバーに入港中のことであった。行年五十一才。今日からみれば天折だった。遺骸は、純白のピロイドのはられた洋風の棺に、タキシード姿で、顔には薄化粧さえて安らかに眠っているような姿で送りとどけられた。

一九二八年の夏、私は大学の休暇を利用して、生前父の御世話になった方々にお礼を申し上げるため、また父終焉の地を親しく自分でみるため、バンクーバーの地を訪れた。これが前後三回にわたるカナダ訪問の最初である。それは日加修交条約の締結前年のことで、五十年ほど前のことである。しかし私には、その時の印象がまだ昨日のこのように深く脳裡に刻印されている。

爾来五十年、大変な激動の半世紀だった。私の父祖の地広島に原爆が投下され、先祖代々の墓石は焦土の中に散り失せ、

親類縁者はあらかた死に絶えた。緒戦から敗戦まで兵士として召集された私は、敗戦の秋、栄養失調のため最愛の母を失なった。一時私は生きる意欲をなくしてしまった。

原爆の焦土の跡には、草木も木も生えまといわれた。それが今日みごとに蘇ったのと同じように、私は四人の子供の生長に励まされ生き続けた。

上の二人は建築家になり、コンサルタントとして海外で活躍し、一人娘はインテリア・デザイナーとして独立し、末子は二、三年前からメキシコにあって日墨貿易に従事して、漸く目鼻がつこうとしている。

数年前、子供達は、私達二人の老後のために、伊豆の東海岸の太平洋を見晴らす高台に、小ぢんまりした洋風の隠居所を贈ってくれた。私はここを終焉の地と定め、読書三昧の晩年を送ろうと考えた。

ちょうどその時、東京にいる娘に女の子が生れた。私達にとっては初孫だった。日夜仕事に追われる娘は、生れ落ちるとすぐその孫を私達の手に託した。多忙な娘は、寸暇を見付け、自動車に山のよう

に土産をつむと、月に一度は子供の顔を見にかえって来たが、すぐとんぼ返りに東京の仕事へ帰っていった。孫はそうしたものと、思いこんでいるのか、母親の後も追わず、私達祖父母との生活になじんだ。私達は私達で、日々生長してゆく孫

娘の可愛さに耽溺し、時の過ぎるのを忘れた。そして気付いた時には、孫は幼稚園のコースを終わろうとしていた。

老妻の方は至極元気だったが、反対に私の方は数年前に心不全で入院したのを手始めに、皮膚癌、前立腺肥大、背髄炎などのため、入院手術の日が続いた。

しかし一九七七年の晩秋、小康状態を利用して、私達は孫を連れ、メキシコにとんだ。毎年年末から温泉場へ赴く代わり、メキシコの息子が混血の孫ができたのに対面するためだった。娘も同行した。

羽田を夕刻出発した私達は、翌朝十数時間後にバンクーバーの空港に着いた。五十年前、単調な二週間の航海の後やつと到着した往時を思い出して、感慨無量だった。

これが私の思いがけない二度目のカナダ訪問だった。空港では、娘の友人のカナダの青年の出迎えをうけ、ただちにベイショウ・インに旅装をとぎ、一週間の滞在を楽しんだ。私は、五十年前の、鮮烈な針葉樹林のバンクーバーの思い出を忘れることができなかったが、すっかり近代化されたバンクーバーの面影には、往時を偲ぶよすがもなかった。孫にも、母親との楽しい旅だった。

一週間の楽しい旅行者としての滞在を終わると、私達はカナダの青年も同行してメキシコへ入った。

クリスマスから正月へかけ、祭礼に湧いているメキシコの二か月の滞在中、私は遺跡巡りもさることながら、シケイロを中心燃え上ったメキシコ芸術の革命、壁画運動の研究に没頭した。毎日美術館巡りだったが、その疲れがでたのか、サンフランシスコ見物を終えて帰国する

と、またすぐ入院だった。これより先、バンクーバー滞在中、私はカナダの青年から娘との結婚の許可を求められた。彼も私達に同行して、メキシコを訪問したのだったが、一足先にモントリオールに帰り、両親の許可を得て、娘が来るのを待つと言うことで、娘はサンフランシスコで私達と別れると、モントリオールの彼のもとへ赴いた。

私は入院中の病床で考えた。私達はもう孫を養育するには年をとり過ぎた。それに娘がカナダで新しく家庭をもつ以上、一刻も早く孫を母親の手に渡し、彼等の新しい生活の中に加えることが必要であろう。それには学令に達したこの機会を他にしては他にない。

しかし、今、孫と別れることは、私には堪え難い寂しさであると同時に、言葉の通じない異国で孫がどんなに心もとないことだろうと思うと、不惑でならなかった。

私は息子達に相談した。息子達は私の気持を察したのであろう。いっそ孫と一緒に私達もカナダに行き、暫く一緒に暮らしてみても、思いがけない提案だった。そしてそれには娘夫婦も大賛成だった。折よく手ごろな売家が見つかり、息子達は私達のためにこれを買ってくれた。早速娘夫婦は内部の改装にかかり、改造途中であったが、孫を九月の新学期から入学させるため、八月末に娘は私達を迎えに帰国した。

まことにあわただしい、思いがけぬ三度目のカナダ訪問だった。

「秋」

私達の新居は、センコンというモン
リオールから高速で約二時間北に走った、
白樺と美しい湖の多い静かな村にあった。
モンリオールの人々の夏期の避暑地で
ある。

人口はおよそ二千人。ただし夏期は三
倍に膨れ上るゆるやかな高地で、一本の
澄んだ川が村の中央を流れ、あちこちの
森や湖畔に、赤い屋根の瀟洒な別荘の見
え隠れする美しい村だった。

白い教会の塔の見える村の中心は、家
から約二キロほど下にあり、小学校も教
会の近くにあり、毎朝黄色のスクールバ
スが坂を登り、家の前まで迎えに来るの
だった。

到着した翌日から、早速孫は学校へ出
かけた。一応顔をだしてから当分は家に
居ればいと考えていた私は、毎朝八時
に迎えにくるバスにさつさと乗りこんで
登校してゆく孫の姿に、驚きの眼を見張
った。それは到底そのまま信じ難い奇蹟
を見る思いだった。

翌日も、またその翌日も、孫は門の所
に立って、バスの来るのを待ちかねる風
だった。思わず私は心の中で合掌した。

東洋人の子供が珍らしいこともあった
のであろうか、孫は皆から大切にされ、
当人も今まで接したことのない金髪の子
供達が自分の知らない言葉で話しかけ、
上級生のお姉さん達からまで贈物をうけ、
自分も一日一日少しずつ彼等の言葉を覚
え、意味が分ってくる楽しみを味わった

ようだった。

それに一年生の最初から授業を受けた
のがよかった。先生は一樣に何も知らな
いものとして、アルファベットの文字か
ら始められ、一日に二つか三つづつ発音
を厳しく教えられるので、その限りでは
孫も授業についてゆけるばかりでなく、
よくできると先生からキャンターの御褒
美をいただき、日によっては孫はキャンテ
ーを一つも三つもいただいて帰ってきた。
私達はどうぞこの調子で続くようにと祈
った。

孫の学校のことで私達が夢中になつて
いる間に、さつさと秋は更けていった。

カナダの秋の美しさは格別である。ほ
つほつ色つき始めたかと思うと、あつと
言う間に山々には楓の真紅の紅葉が燃え
たち、深い緑の湖水に影をおとす姿は、
名状し難い美しさだった。

「冬」

カナダの秋は足早に去ってゆく。ひと
しきり秋の紅葉を楽しんだかと思うと、
急に冷えこみ、白いものがちらちらする。
昨年は殊に降雪が早く、十一月末には初
雪をみた。そしてクリスマスを迎える頃
には、山野は深い雪におおわれ、家もす
っかり雪に埋まる。

戸外は、夜間は零下三十度の冷えこみ
だが、家の中には赤々と暖炉が燃え、少
し厚着をすると、額が汗ばむほどだった。
親切な人達はかりだった。それに雪に
閉ざされた単調な生活もあつて、次々と
様々な人達が訪ねてくださった。そして

皆一樣に、単調な雪に閉ざされたカナダ
の冬は堪え難いだろうと慰さめて下さつ
た。

その訪問客の中に、ロレンソ先生御夫
妻がおられた。お二人とも八十に近い御
老体であつたが、実に元気な方達で、直
ぐ近くの湖畔の立派な別荘を売り払つて、
三年前キャンピングカーにピアノと画材
を積みこみ、アメリカ各地からメキシコ
まで、二年間にわたつて気の向くままに
楽しい旅を続けられ、最近帰つて来られ
たという、白髪髯の堂々たる老人だつ
た。モンリオールの音楽学校を出られ、
音楽家であることは勿論のこと、画家で
もあつた。大孫を可愛がつてくだされ、
ピアノを教えて下さることになり、先生
がなくて弱つていた時だけに有難かつた。
森の木立の中に大きなキャンピングカー
を固定し、夏場はそこに泊られるようだ
つたが、現在はシヨリエットというモン
リオールへの途中の大学のある小都市
に住んでおられるので、私達は家族ぐる
み、週に一度お邪魔をし、孫がピアノを
教わっている間、私は立派なアトリエで、
お二人の画を拝見したり絵を描かせてい
ただいた。私達の周辺ではこのような愉
快な老後の愉しみ方を知らないで、頭
がさがつた。

若い人の中にも、婿の友人で親御さん
からモンリオールのスーパーの経営を
引きついだ愉快な御夫妻がある。徹底し
た都会嫌いで、バカンスには遠く北の方
に、銃とカヌーをもつてでかけ、熊に出
喰わしたりしたという。大きなムースを

一頭射とめたといつて、私達もその肉を
御馳走になつたこともある。週末には御
夫妻でやつてきて、畑作りを手伝つたり、
トラップ(わな)をかけて毛皮になる小
動物を捕獲したりすることが唯一の慰安
だと話していく。愉快なのは、夜は零下
三十度の雪の中に御夫婦で寝袋の中に寝
て、決して家の中に寝ようとしないのだ
つた。大変変わり者のようだが、こうした
型もカナダの若者の中には多く見つける。
それほど自然が大きく美しく、彼等を満
足させるだけの野生動物も豊富に身近に
まだ棲息している。

「春」

孫のスキーやスケートが充分上達しな
いうちに、急に温かい日が続き、春が馳
け足でやつてくる。日本の春、佐保姫は
霞と共に静かにやつてくる。しかしカナ
ダの春は、大きな自然だけに、実に豪快
である。雪どけの水は森に滝のような轟
きを響かせ、川面に張つた厚い氷は音を
たてて割れ、尖い氷塊は川面を埋めてひ
しめき流れる。氷塊は所々で川を堰とめ、
水は堤防を切つて道路に溢れる。今年の
春は一度ほど交通が途絶し、私達は孤立
におちいった。

しかし激しいだけに雪どけも速かで、
庭の積雪もとけ、あちこちに地膚が現わ
れる頃になると、白樺や杉の若芽はふき、
たちまち鮮やかな薄緑一色になる。そし
て野鳥の訪れが始まる。暫くは水のせせ
らぎと、野鳥のさえずりが天地に満ちる。
そして野面に美しい花の咲き乱れる頃

には、短い春はもう夏に入る。

「夏」

急に村は騒々しくなる。カヌーを屋根につんだ自動車が往来し、今まで堅く閉ざされていたあちこちの別荘の窓は開かれ、庭で食事をする姿がみられた。あちこちの森に天幕が張られ、湖畔には華麗な水着姿がみられる。モントリオールの子供達のための林間学校や音楽教室がひらかれ、木の間から歌声が流れる。

老人達も、終日庭の寝椅子に裸身で日光浴を楽しむ。しかし一旦木蔭に入ると、何か身にまとつものがはしくなるほど涼しい。日本の夏の蒸し暑さと違い、湿気のない空気は涼しい。

私達は八月の終り、一年にわたるセンコンの生活を切りあげ、モントリオールの山手のアパートへ移ってきた。娘夫婦の仕事の関係もあり、孫は新しく都会の学校へ転校することになった。一年間の交友だったが、お別れの会で涙を浮かべている子もあつたという。

今度は大きな二つの教会にはさまれた立派な学校である。鐘のなるのが聞こえるほど家に近い。はじめ孫娘との別れの悲しさに、カナダへ来てしまったが、孫の方はもう問題はなくなった。幸い、昨今身体の調子も悪くないので、少し暇をすえて、カナダのことを調べたいと思っている。

なんと言つても広大な国土である。悠揚迫らざるこの国の人達のスケールの大

きさを思うと、狭い国土にひしめき合いながら、狂気のように日夜馳けずり回っている日本の不幸に涙さえ催す。教育然り。文化の一端としての放送文化しかり。商業主義に毒され、小間切れ文化になっている悲惨な現状には、眼をおおいたくなるものがある。

その意味で、日本とカナダは全く対照的な国柄だけに、幸い両国間の五十年の修交の間にも、さしたる障害をみなかっただけ、更に一層親交を深め、カナダの文化の本質に触れ、大いに反省に資する

〈佳作〉

今後の日加貿易関係

国家間の経済関係は、貿易、資本、技術等の交流を通して展開される。日加間の経済関係は、その交流が始まったときから貿易が中心であり、今後、資本、技術等の面でも交流が盛んになることが予想されるもの、貿易が両国の経済関係の中心であることに変わりないであろう。

日加間の貿易は、これまでカナダが日本に原材料等を輸出し、日本がカナダに製品輸出をするという貿易パターンであるが、これは資源輸出のみならず、製品輸出の拡大をめざしているカナダの貿易路線と必ずしもかみあわなくなってきた。

相手国としては、最適であらうと思う。

もちろん、この国にも種々困難な問題はあろうであるが、国土の広大さ、各種資源の豊富さ、又悠揚迫らざる国民の鷹揚さ、スケールの大きさ等を思うと、きたる二十一世紀は、カナダの世紀になるのではなからうかという気がする。

なにはともあれ、
美し国、なれが頭は美しき華に飾られ
…のカナダ国歌の歌詞通りの栄光を、
私は信じたい。

坂本信雄
(千葉県松戸市 公務員)

また、食料品や原材料にしても、両国間の貿易を一層拡大する余地があるように思われる。

日加間の長期的な貿易関係はどのようにあるべきか考えてみよう。

一、日本は食料品の輸入依存度を高めよ

日本の食料品輸入額は、一九七五年の八十八億ドルから七八年には百十四億ドルへ増加した。この間に、カナダの対日食料品輸出額は六・五億ドルから七・九億ドルへと増加したが、日本の食料品輸入に占めるシェアは、七五年よりやや後

退して七パーセント弱(六・九パーセント)である。カナダの対日輸出で最大の品目は、小麦に代わって菜種であり、最近では教の子、鮭などの魚貝類の対日輸出の増加が目覚しい。

日本の食料品の全体の輸入額は、先進諸国のなかで西ドイツ、アメリカについて大きく、穀物、大豆等の主要農産品では世界最大の輸入国となっている。これを国内自給率との関係でみると、野菜(生鮮)、卵類ではほぼ完全自給を達成しているが、飼料用穀物である麦類、豆類等では、すう勢的にも自給率が低下している。また肉類、果実、牛乳、乳製品ではアメリカ、EC諸国の自給率を総じて下回っている。

こうした自給率の動向と所得水準の向上を反映した食生活の高度化、多様化を考慮すると、日本の食料品輸入の余地はまだまだ大きいとみるべきだろう。では、どの程度輸入依存度を引き上げることが可能だろうか。七五年の国内生産+輸入の合計に対する輸入分の比率(輸入依存度は二三・四パーセントであるが、これを仮に三〇パーセントにするには、輸入額が三兆三千四百九十一億円でなければならぬ。七五年の実際の輸入額二兆六千六百六十三億円に比べて二八パーセントの増加となる。数量ベースでこの伸びを続けていることは、国内生産を一定に止めさせずれば輸入依存度三〇パーセント程度の達成はそれほど困難でないことを意味しよう。輸入依存度の上昇は、カナダの農水産物の対日輸出の増加をもたら

加工資源輸入比率(1975年)

	日本	アメリカ	西ドイツ
銅	26.0%	78.8%	78.3%
鉛	13.1	63.6	58.1
亜鉛	7.2	84.2	38.1
アルミニウム	80.4	56.1	72.2
木材	17.8	54.1	61.4

(備考) 加工資源比率は次の算式による(金額ベース)。

$$\text{金属類} = \frac{\text{地金} \cdot \text{合金}}{\text{地金} \cdot \text{合金} + \text{鉱石}} \times 100, \quad \text{木材} = \frac{\text{木製品} \cdot \text{家具}}{\text{木製品} \cdot \text{家具} + \text{原木} \cdot \text{製材}}$$

(資料) OECD Statistics of Foreign Trade Cシリーズ

国内の需要活動の変動が輸入需要の増減をもたらすことは良く知られている。日本経済は、石油危機後の七五年から景気回復過程にあり、輸入もようやく増加傾向にある。製造業の生産活動と密接な関係をもっている原材料輸入の動向をみると、過去の景気回復過程では製造業の生産の伸び率を上回る原材料輸入の増加がみられたが、今回の景気回復過程では

すに違いない。問題は、農林水産物がもとも農業保護思想が根強く、輸入拡大に消極的なことである。現在の残存輸入制限品目二十七品目のうち、二十二品目が農産物であることがこれを物語っている。多かれ少なかれ、農林水産物の保護措置は諸外国に共通しているが、日本はこれを温存しつつ、工業製品輸出を中心に大幅な外貨を獲得しているために、諸外国から批判が高まっている。したがって、長期的には、農林水産物の分野にも国際分業の考えを導入し、その依存度を高めることが、日本の対外経済政策として有効・適切な手段となる。

二、日本は加工資源の輸入比率を高めよ

それほど原材料輸入の伸びが高まっている。原材料輸入の伸び悩みは、その輸出依存度の高いカナダの対日輸出不振と結びついている。名目ベースでも、石油危機後のカナダの原材料の対日輸出は僅かな増加を示しているにすぎない。これは生産国であるカナダで、例えば金属産業が生産不振に陥っていることも原因であるが、基本的には鉄鋼、非鉄金属等の輸入原材料使用産業にみられるように、生産一単位に必要な原材料消費量の比率すなわち原単位の向上が進むなど、いわゆる省資源・省エネルギーの推進による油危機前と後における消費の変化と輸入の関係を見ると、カナダの対日輸出の不振が日本の資源消費の鈍化ないし減少と対応していることがわかる。

資源の「節約」が長期的に進む状況のもとで、資源輸出国が新たに対応する道

は加工資源の輸出拡大である。原油、鉱石、原木等の自国資源を加工して、付加価値の高い精油、石油化学製品、地金、合金、合板等を輸出することは、資源輸出国の共通の課題である。カナダでも、例えば木材についてみると、丸太からバルブ用チップ、包装紙等の輸出が行われている。カナダの資源加工の度合を他の資源輸出国と比較してみよう。金属加工についてみると、カナダの現地加工比率は銅で第三位、鉛で第二位、亜鉛で第四位、ニッケルで第二位となっている。

三、日加間の機械類貿易を拡大せよ

資源輸出国の資源加工の期待が大きいのに対して、日本の資源加工の輸入比率は総じて低い。アメリカ、西ドイツと比較すると、アルミニウムの加工輸入比率は日本が高いものの、銅、鉛、亜鉛、木材では日本が両国のそれをかなり下回っている。一般に資源輸出国で資源加工が高まれば、輸入国の国内一次加工産業が影響をうけることになる。しかし、今日の日本は公害問題、電力コストの増大等により、工場立地が困難になるなど、消費地加工としての有利性が少なくなってきた。カナダの資源加工化に対応して日本が資源加工の輸入比率を高めることが、カナダとの相互依存関係を一層深めることになり、そのことが結果的に資源の長期安定確保につながるようになる。

石油危機後、日本の原材料輸入が伸び悩んでいるのに対し、製品輸入は増加している。カナダの日本向け工業製品輸出も増加しているが、これは非鉄金属製品、紙加工品などよりなるその他製品の輸出増加が大きい。化学品も増加しているが、カナダ側の最大輸出品目である機械器の対日輸出は、むしろ減少すらみられる。近年、日本の機械類輸入は、E.C.、東南アジア諸国からの輸入増加が顕著であり、輸入額の約半分を占めるアメリカからの輸入も増加している。他方、カナダの機械類輸出の増加率は、ここ数年の動向をみても、輸出全体のそれを上回っており、輸出構成に占める比率も原材料を追い抜いて最大のシェアとなっている。こうした状況のもとで、日本向け機械類輸出の不振が顕在化していることに問題がある。

カナダは単に資源輸出国にとどまるとなく、工業品輸出国としての産業高度化政策をとっている。このため公式、非公式の会合で、機械類輸出の拡大を日本に要請しており、日本もそれなりの対応が必要であるが、以下では両国間の機械類貿易のあり方について考えてみよう。

(I) **カナダは国際競争力を高めよ**

まず、日本のカナダ向け機械類輸出は、七六年で八・五億ドルであるが、カナダの日本向け機械輸出額は僅か四千万ドル弱である。両国の輸出構成をみると、日本のカナダ向け輸出は概ね日本の輸出全体の構成と同パターンであるが、カナダの輸出構成は既述のように、輸出全体では機械類輸出のシェアが高いものの、日本向けでは原材料のシェアが圧倒的に高く(九三パーセント)、機械類のそれは僅か(一・六パーセント)にすぎない。そして、日本のカナダ向け機械類輸出がカナダの機械類輸入に占めるシェアは四・六パーセントであるのに対し、カナダの日本向け機械類輸出が日本の機械類輸入に占めるシェアは僅か一パーセントである。

つきに、品目別に両国の輸出特化の度合をみてみよう。日本は多くの品目で特化しているが、原動機、農業用機械トラック、自動車部品では、カナダの特化が日本のそれを上回っている。しかし、こ

これらの品目が日本向けでふえている徴候はない。(カナダの特化が著しく、かつ日本向け輸出が増加しているのは、アルミニウム地金、紙及び板紙などのその他製品なのである。)

日本市場でカナダが後退する原因は、種々考えられる。多くの見方は、品質、販売努力、アフターサービスなどの非価格競争力の面で劣るとか、仮に価格競争上優位であっても日本の需要構造に対応して、新製品を開発していないなどの問題点が指摘されている。

一般的にも、カナダの国際競争力について多くの問題が指摘されてきた。①概して多種少量の生産なので生産コストが高つく。②資源部門の好景気が賃金コストの上昇をもたらし、これが製造業部門へ影響する。③カナダの高関税が結局、企業の競争力を弱めているなどであった。さらに最近では、イギリスと同様、公共部門の支出増大が私的消費の伸びを圧迫し、これが労働組合運動の激化をまねき、失業とインフレの共存をもたらしているなどの指摘がある。最近のOECDの報告によると、実質賃金の上昇率と生産性上昇率のギャップが、主要先進国のなかでカナダがもっとも大きいことがわかる。カナダがその国際競争力を高めるためになすべきことは多いように思う。

(II) 日本は工業製品相互取引を拡大せよ

日本の製品輸入拡大をめぐる事情についてみてみよう。最近、日本の製品輸入が増大しているといっても、日本の輸入全体に占める比率は七八年で二六・七パ

ーセントと他の先進工業国のそれをかなり下回る。もっとも、資源の大半を海外に依存せざるをえない日本としては、工業製品輸入のシェアが相対的に低くならざるをえない事情にある。しかし、長期的にカナダと円滑な貿易関係を築いてゆくためには、日本が製品輸入の拡大をはかるべく、貿易構造を転換してゆくことが重要である。

このため、第一に、工業品の中間財取引や最終財取引などで工業品の相互取引を拡大してゆくことである。日本は他の先進国に比べて、製品の生産過程での投入財の大半が国産品で占められるという製品の自給体制がもっとも進んでいる国である。これに対して、アメリカでは、とくにカナダとの間で、例えばアメリカ製の半導体をカナダへ輸出し、カナダで完成品を製作してこれをアメリカに輸出するというような相互輸出入関係がみられる。また、ECも、域内貿易の自由化により貿易量が増大しているばかりでなく、各国の輸出構造がむしろ類似化してきている。このことは、各国が必ずしもますます特化傾向を強めているのではなく、各国が同じ産業の製品であっても異なる型・質の商品を相互に輸出すると同時に輸入するという、新たな分業型態が生れてきているからである。このような工業製品の相互取引の拡大が、日本とカナダとの間でも可能であろう。この場合でも、既述のように、基本的にカナダの製品の国際競争力がなければならぬ。

カナダの対日製品輸出拡大の要請を大

別すると、①CANDU炉、STOL機、宇宙衛星機器、②通信機器、コンピューター、家電製品、自動車とその部品、に分けられる。このうち、①はカナダの技術的評価が高い製品であり、カナダが輸出に成功すれば単価の大きさもあって製品輸出増大に大きくつながらる。②は現在、日本のカナダ向け輸出の中心をなすもので、この分野での工業製品の相互取引を増大させる余地が大きいとみられる。しかし、現在のところ、通信機器だけでも七二〜七八年間の日本からカナダ向け輸出額が約十六億ドルであったのに対し、カナダの対日輸出は僅か六千五百万ドルであった。もっとも通信機器の貿易は、カナダの国際競争力の問題があるというよりも、日本の電々公社の物資調達の上の理由により、輸入がほとんどふえていないことが大きな原因である。この面で、東京ラウンド(多角的貿易交渉)で日本の市場開放化をはかることが重要である。また、自動車部品や農業用機械等は、カナダの国際競争力が強い品目であり、日本市場の開放が輸出増大をもたらすことになる。

(III) 日本はカナダの製造業部門に対する海外投資を増大せよ

海外投資が、やがて投資国の輸入増加をもたらすことがしばしばみられる。アメリカの海外投資の約七割が対カナダ投資であることと、カナダの輸出の約七割がアメリカ向けであることは、全く偶然ではない。すなわち、アメリカから、在カナダ子会社に向けて部品、素材等が

輸出されるが、これが完成品になると、在カナダ子会社から逆にアメリカに輸出されるという関係にある。

日本のカナダに対する海外投資額は、日本全体の投資額の三パーセントに相当する五億八千五百万ドル(昭和五二年度末現在の累計、許可ベース)で、このうち製造業に対する投資は約四割である。しかし、そのほとんどが木材、パルプ、非鉄等の資源関係に対する投資で、化学、機械等の製造業に対する投資はきわめて少ない。アメリカの事例をみるまでもなく、製造業に対する海外投資の増大は、やがてカナダの対日製品輸出の増加をもたらすことになろう。そのことはまた、カナダにおけるアメリカの海外投資の偏重にもなう種々の衝撃を、少しでも緩和することになるかもしれない。

むすび

長期的に日加間の貿易を安定的に拡大してゆくためには、これまでのカナダが日本に原材料等を輸出し、日本がカナダに製品を輸出するという貿易パターンでは不十分である。カナダの工業品の国際競争力に対応して、日本もこれを輸入拡大してゆくという貿易パターンが、指向されなければならない。これは日本市場の開放と、それにとりもなう一部産業の打撃をもたらすが、自由貿易のもとに国際競争力を高めてきた日本としては、これにかかわるコストを負担してゆかざるをえないと思う。

